

# 中世ピーサ年代記<sup>1</sup>

## (II)

メローリアの敗戦(1284)から自治都市国家の終焉(1406)まで



図II-1 中世ピーサ史の中心舞台ピ°アツツァ・テ°リ・アンツィアーニ

### 4 衰退期：1284-1383

1284年8月6日メローリアでジェノヴァに壊滅的な敗戦を喫したピ°サは、通商ととりわけ軍事面での海上力を失って、地中海を舞台とする国際的勢力からは姿を消し、15世紀始め(1406年)ついにフィレンツェによって征服されるまで、

トスカナの一地方都市としてもっぱら内陸で自らの生存を賭けて闘うことになる。また、かくして海外への進出を阻まれ、一方内陸では発展するフィレンツェの拡大に圧迫されて、内部で党派争いと権力闘争の度を深め、コムーネ(自治都市)の理念たる市民による共和・民主の体制は終わりを告げ、僭主的シニョーレの登場を見、シニョーリア専制体制へと移行してゆくことになる。

さて、その戦後対策としてピサのアンツィアーニ評議会は、生き残った最大の実力者として、またトスカナのグェルフィや教皇との個人的関係からして、フィレンツェとジェノヴァの敵対政策をかわす最適の人物としてウゴリーノ伯をポデスタに選んだ。10月18日任期一年で受諾した伯は、フィレンツェに譲歩してなおジェノヴァと戦うことを基本政策とした。と同時に、これをシニョーリアへの道を開く機会ととらえ、独裁を指向することになる。

一方フィレンツェとルッカは、今こそピサの息の根を止めんものとさっそくジェノヴァに三者同盟を提案し<sup>2</sup>、プラート・ピストア・シエナらアレッツォ以外のトスカナ中小都市もこれに加わった。11月には早くも陸からはフィレンツェとルッカが、海からは50隻のガレー船でジェノヴァが攻撃してきたが、ピサもよく応戦してこれを凌いだ。

翌1285年2月任期10年で再任されたときにはカピターノ・テル・ポホロにもなり、政治と軍事の全権を握って実質的なシニョーレとなったウゴリーノ伯は、フィレンツェが本当はジェノヴァとルッカの勢力拡大を望んでいないのを見て取り、個人的ルートを通じてフィレンツェと交渉し、同年4-5月サンタ・マリーア・イン・モンテ、フチェッキオ、カステルフランコ<sup>3</sup>の城塞ら領土の一部の割譲と市政治のグェルフィへの全面的転換を約束して和平を結び、当面の危機を脱した<sup>3</sup>。ルッカもウイアレツジョら一部の領地を譲られたため離反、ジェノヴァはこれを怒って三者同盟は瓦解した。ジェノヴァとは交渉しなかった。

しかしピサは伝統的にギベッリーニであり、数の上でも心情的にもまだまだ同派が圧倒的に優勢であり、外交的にはこうして危機を脱したウゴリーノ伯も、内政ではグェルフィ路線を推進することには困難がともなった。そこで翌1286年7月には、グェルフィ勢力の協力を得て市政を安定させる必要上、そのリーダーたるウイコンティ家の、しかも娘を嫁がせたジョヴァンニ・ディ・ウバルトの子つまり外孫にあたるガッラーラ国主ニノ(本名ウゴリーノ)をサルデーニャから呼び寄せ、共同統治者としてポデスタ兼カピターノとした。

かくして権力を確立した伯は、グェルフィであれギベッリーニであれ自分に敵対する勢力を激しく弾圧した。一方、野心的な若者であったニノも自らの

勢力拡大につとめた。かくて市は、ゲルフィ対ギベッリーニの対立に加えて、ゲルフィ内の二人のシニョレの間で分裂し、両派の不法行為と私闘でカオス的となり、アンツィアーニ他の公権力は無力化して法治できなくなった。

一方、こうした専制体制と強引な反対勢力の抑圧に反感を募らせるギベッリーニと、伯の貴族政治に不満を抱く商工階層・職人たちは、大司教ルジジエーリの周囲に結集した。ルジジエーリはウバルティエーニ家出身だったため、二大貴族ゲラルテスカとウイスコンティの中間にあった。

メーリア敗戦以来のピエーサの懸案は、ジェノヴァの監獄になお捕らわれている捕虜たちの解放問題だった。対外的にはフィレンツェとの協調を基本としてジェノヴァとはなお戦う姿勢を崩さず、対内的にも自らの権力の強化を狙うウゴリーノ伯は、必ずしもそれに積極的ではなかった。しかし、釈放要求は市民の暴動の動きとなり、また獄にあったファーツィオ・テッラ・ゲラルテスカらを中心とする有力貴族たちの訴えと圧力で、1288年4月15日ようやくジェノヴァとの和平が結ばれた。ところがその条件が、カリアのCastro城を含むサルデーニア、それにコルカとアークの領土の譲渡、賠償金としてジェノヴァ金貨3万4千リラの支払いというものだったため、サルデーニアに領土を有する貴族、とりわけ最も利害の絡むウゴリーノ伯の無視にあって、結局履行されず、捕虜の解放はならなかった<sup>4</sup>。かくて、この和平を積極的に支援していた大司教との関係は当然悪化していった。

そこで6月30日、ウゴリーノ伯が市郊外カシーナ(市の東10km)近くのセッティモの城にあった折を見計らって大司教は、グアランディ、ランフランキ、シズモンディらギベッリーニ貴族を引き連れて反乱を起こし、市を暴君の手から解放しようと煽り、ニーニを含むウイスコンティ一門とゲルフィを追放した。そしてアンツィアーニたちとギベッリーニは、ルジジエーリをポテスタ兼カピターノに選んだ。

計られたと知り、翌朝手勢を率いて市に乗り込んできたウゴリーノ伯は大司教側と衝突し、市内全域でゲルフィ対ギベッリーニの戦いが起こった。数に劣るウゴリーノ伯側は追いつめられ、市庁舎に閉じ込もって抵抗したが火で攻められて降伏した。ガエターニとウパッスィンギら彼に味方した貴族は市を去るとの条件で解放されたが、伯自身と息子ガットとウグッチオーネ、孫ニーノ(イル・フリガータ)とアンセルムッチョの5人がカピターノの館に捕らわれた。

彼らは、後に「飢餓の塔」として知られることになるトル・ディ・グアランディに移され<sup>5</sup>、最初は人道的に扱われていたが、ギベッリーニはその解放に莫大な身代金を要求し、交渉の間に少しずつ食糧が減らされた。翌1289年2月頃相次いで最初に息子二人、次いで孫二人が餓死し、80歳代の老伯は

最後まで生きていたといわれる<sup>6</sup>。

カルチに逃げたニーノは8月、ウパッス・インギラ・ピーサの亡命者を率いて城壁近くまで攻めてきたが、市はこれをよく撃退した。さらに、フィレンツェ、ピストイアらトスカナのグェルフィ市は、この機会を逃さず来攻し、アジャーノの城を奪い取った<sup>7</sup>。が、ピーサはこれも翌年には取り返す。ジェノヴァは港と沿岸、それにエルバ島を荒らした。

分裂し混乱した市の秩序回復は、著名なローマニアの傭兵隊長だったグイート・ダ・モンテフェルトロに託された<sup>8</sup>。翌1289年5月13日カピターノ・ジネラレとして着任したこの優れた戦術家は、ギベッリーニに戻ったポ・ポロ市政を立て直し、軍備を整えてよくその任を果たし、まずルッカやフィレンツェに奪われた領地や城を回復した。フィレンツェの攻撃も執拗に繰り返され、カンパルティエーノでアレッツォのギベッリーニに勝利したフィレンツェは、同年8月には1万の軍でカプローナの城塞を陥落させた<sup>9</sup>。翌1290年はコルツ・ドナーティの軍、1291年にはトスカナ同盟の攻撃、1292年にはフランスとカタルーニャの傭兵とフィレンツェの軍が城壁の下まで押し寄せてきたが、グイートはいずれも巧みな戦術でよく凌いだし、それに何よりも市の城壁とその守りが堅固だった。

1293年1月「正義の規定」を制定して豪族を追放し、商工業市民によるポ・ポロ体制をさらに強めたフィレンツェは3月、ジアーノ・テバルティ・テッラ・ベッラのもとでピーサと和平交渉を開始し、1293年7月12日フチェッキオにトスカナ各市の使節が集まって条約が結ばれた。ピーサは領土の譲渡のほか、フィレンツェ商品のピーサ領内自由通過権の承認、ウゴリーノ伯の生き残った息子たちグェルフォとロットとその一族を支援しないこと、ポテスタには2年間トスカナのグェルフィ同盟都市以外から招かないこと、そして何よりも傭兵隊長グイート・ダ・モンテフェルトロの解任という形で成立した。

一方、サルデーニャのカストロ城にあって難を逃れたウゴリーノ伯の長子グェルフォは、ウイッラ・ティ・キエーザ(現イグレスias)に移った後、まず父の復讐にルジジェーリの代官をしていたヴァンニ・グッパッタを殺した。また、先の海戦でジェノヴァに捕らえられていた弟のロットも、大金を払って獄から解かれ、兄と合流してサルデーニャを支配下に置いた。これに対してピーサは、1295年兵を送ってアルボレーア国主マリアーノの支援の下に彼らを攻め、グェルフォを捕らえて島の支配権を取り戻

した。

ルジヴェリ大司教は、ポテスタの地位にあったのが1288年の7、8月の二カ月だけだったためかの殺戮の責任を問われず、後任のフオッコロ・グッベッタが問われていた。しかし、ニーノが教皇ニコラウス4世に訴え、事件を調査した枢機卿コロンナによってルジヴェリに永久投獄の判決が下っていた。そのため地位を追われることはなかったが、釈明にローマに向かう途中1295年にウイテルボで没した。

ニーノはその後ジェノヴァに行ってその市民となった。これを歓迎したジェノヴァ市は、ウイコンティ、ウベッズインギ、トウオーティ、ガエターニらのグェルフィ家門の捕虜を解放するとともに、彼がサルデーニャに渡って自領を回復するのを助けた。しかしニーノも、1296年にはそこで没した。こうして、フランク時代以来のピエーサの主役だったウイコンティが退場した。

フチェッキオの和平の後若干グェルフィ寄りとなったピエーサ政府は、1296年2月ポテスタに時の教皇ボニファクス8世(在位1296・12・24-1303・10・11)を選んだ。これによって教皇代理としてエリア・ダ・コッレ・ウアル・テルサが派遣されてき、1289年にニコラウス4世によって出されていた聖務停止令が解かれた。

1299年7月25日にはようやくジェノヴァとの和平が成立し、25年の平和条約が結ばれた。その条件は結局海戦直後に出されてピエーサが拒否したのと同じもので、ピエーサの海岸を南はカステリオーネ・テッラ・ヘスカイアから北はセルキョ川までとすることと、コルシカ島、サルデーニャのトルレス市・サッカリ市、ピアノーサ島の支配権の放棄であり、見返りはジェノヴァの獄に繋がれている捕虜の釈放だった。しかし、1282-84年に捕らえられた1万人ちかくのうち、これにより15年ぶりに祖国に戻ったのは千人程度にすぎなかったという<sup>10</sup>。

この間国際情勢は、パレルモでの晩鐘の乱(1282・3)後分立する形となっていたナポリ・アンジューのシャルル1世とシチリア・アラゴンのペドロ3世はともに1285年に没し、ナポリはカルロ(シャルル)2世(在位1285-1309)に、シチリアはジヤコモ1世(1285-95シチリア王)に代わっていた。そのジヤコモは、本来アンジュー支持だったはずの教皇ボニファクス8世と取り引きし、密かにサルデーニャの譲渡を求めていた。ピエーサのポテスタであったはずの教皇もそれに応じ、1297年4月5日それを封土として彼に与えていた。ジヤコモはしかし、マンフレディの娘コスタンツァの子でグッベッタニだったため、サルデーニャにすぐ手をつけることは控えていた。

一方フィレンツェではグェルフィ内部でネーリ（黒派）とビアンキ（白派）の争いが熾烈化し、ギベッリーニだったピサとアレツォ以外の全トスカーナに及んだ。最初白派が優勢だったが、教皇の政策とフランスのフィリップ美王が送り込んだシャルル・ド・ヴァロア伯の介入で1301年10月黒派が勝利した<sup>11</sup>。これによって、1305年フィレンツェ・ルッカ連合軍がピスタヤを包囲し、ピサは同市に援軍を派遣したが、翌1306年4月には降伏した。シチリアを失ったアンジューの威信はすっかり低下し、もはやトスカーナを治めることはできなくなっていた。ナポリでは1309年にカルロ2世からロベルト(1309-43)に、シチリアではジャコモのアラゴン王即位(ハイメ2世1291-1327)にともない弟のフェデリコ2世(1296-1337)に王位が移っていた。

そのアラゴンが、いよいよサルデーニャに対する権利を主張し始める。島の有力貴族ラニエリ・ディ・トノラティコがマンフレディの娘ベアトリーチェと結婚したため、アラゴン王はトノラティコ家と親戚関係に入った。1303年幽閉されて憤死したボニファキウス8世の後、ベネディクトゥス11世の短い治世をはさんで継いだクレメンス5世(1305-14)は、ボニファキウスがジャコモに与えていたサルデーニャの宗主権を認めた。そこでアラゴンはグェルフィ同盟をピサにし掛け、同盟もアラゴンの征服を支援した。サルデーニャにおける既得権を守るべく、ピサは1307-8年アラゴン王のもとに使節団を派遣して交渉したが無駄だった。教皇は1309年にフィリップ4世の手でアヴィニョンに移り、イタリアでの政治的影響力を低下させていた。

この頃帝国に登場してきたのがハインリヒ7世であった。ピサもダンテと同じく、彼に最後の望みを託すこととなる。ルクセンブルク公ハインリヒは1308年12月27日神聖ローマ皇帝に選ばれ、すぐイタリアにおける帝国の権威を主張した。ピサも、1310年3月にはかのグイド・ダ・モンフェルトロの子フェデリコをポデスタ兼カピターノに選んで親帝国路線を敷き、他のギベッリーニ都市とともに多額の資金と使者を送ってその南下を催促した。

そこでハインリヒは1310年10月イタリア遠征に出発、1311年1月6日ミラノでイタリア王となり、サヴォイア伯アメデオらに伴われて同年末ジェノヴァに入ったが、そこで妻マルゲリータ(・ディ・ブラバント)を失った。同地ではシチリア王フェデリコ2世の使者と会い、グェルフィの後ろ楯となっているナポリのロベルトに対する同盟を話し合った。そこから先の陸路はフランスのシャルルに支援されたグェルフィ同盟の手にあり、ジェノヴァも皇帝軍の輸送を拒否したため、ピサの船団が迎えに行き、1312年3月6日市に着いた。1か月のピサ滞在中トスカーナとローマニアのギベッリーニたちが

馳せ散じ、亡命中のゲルフィ白派も加わった<sup>12</sup>。市は皇帝に金貨18万フィオリネを提供したが、当時のピサの年収は25万だったといわれる。

ハインリヒは、4月23日マレンマ沿いにローマに向かって出発、ピサから千人の騎士が同行し、ローマはアンジューのナポリ兵が固めていたが皇帝軍がこれを排除した。ピサも7隻の船を派遣して海から支援し、6月29日ラテラーノで戴冠した。シチリアのフェデリコと友好を結び、ナポリのアンジューに挟み撃ちの圧力をかけた。しかしナポリには進軍せず、フィレンツェが忠誠の誓いを拒否したためトスカナに向かい、2カ月にわたってフィレンツェを攻囲したが陥とせず、翌1313年3月9日にはピサに戻ってきた。

2回目のピサ滞在は6カ月に及び、その間に市政府からゲルフィを一掃した。1313年5月フィレンツェがナポリのロベルトに5年の任期でシチリアを提供したため、再度南イタリア遠征の準備にあたった。教皇はそれを中止するよう脅かしたが、同盟したフェデリコがすでにメッシーナを落ち、カラブリアを平定してガエタに向かっていたので、ピサ(15隻)もジェノヴァやシチリアとともに計70隻の船団を南に派遣した。皇帝は8月8日陸路騎兵4千歩兵1万でシチリアに向かって発ったが、8月24日ブオンコンヴェントで病没した<sup>13</sup>。長く肝臓を患っていたといわれる。帝国軍は解散し、各市の船団も戻り、皇帝の遺骸はピサに持ち帰られて、当時トウオーモ造営団の棟領だったティエリ・ティ・カマイーノ彫刻になる棺に埋葬された<sup>14</sup>。かくて、『帝政論』を用意したダンテと同じく、ピサも最後の望みを失った。

3年近くにわたる皇帝のイタリア滞在中巨額の資金と多数の兵を提供したピサは、結果的には何も得るところなく終わった。そこでその代償として皇帝軍の残留を求めた。かくて10人の隊長と800人の騎兵がそのまま市に留まって傭兵となった。これはピサがもった最初の本格的な外国人傭兵であり、その後大きな力となる。

最後の望みを断たれたピサは、もはや民主制では持ちこたえず、ポデスタに外国人を求め、60歳と高齢だがジェノヴァの皇帝代理で勇敢なギバッリーニ傭兵隊長だったウグッチオーネ・テッラ・ファッツォーラを選んだ(1313・9・20)。カピターノとしての任も託された彼は、さっそくルッカのコンタートに兵を送って攻勢をかけた。彼がポデスタに選ばれたのと同じ頃、シチリア王フェデリコが自らピサに乗り込んできて市のシチリアを求めるということがあったが、市は協議の上これを断った。

ゲルフィ同盟によるルッカ支援体制は必ずしも万全ではなく、フィレンツェの力も

それほど強くなかった。トスカナのゲルフィはナポリのロベルトに支援を要請したが、シチリア回復を狙うロベルトはむしろ、サルデーニャをめぐるアラゴンとの対立を利用してピサに接近を計ってきた。そして1314年2月27日、ピサがシチリアのアラゴンを物質的・軍事的に支援しないこと、フィレンツェ商品の通過料免除、亡命者の相互帰国等を条件に、ナポリで和平条約が結ばれた。ところがウグッチォーネは、フィレンツェとの関係改善を急ぐ商人勢力が中心となって結ばれたこの和平に必ずしも好意的でない実業者層の民意を背景に、ゲルフィ勢力の排除を叫び、対立する富裕商人を代表するバントウッチォ・ディ・ボウコンテを処刑してシニョレとなった(1314・3・24)。

当時ピサ家のシニョリアとなっていたルッカとは、1314年4月25日に和平を結び、領土の返還と亡命者の相互帰国を取り決めた。ところがウグッチォーネは、返還の不履行を口実に、ルッカに戻ったギベッリーニにピサ家の独裁政権に対する反乱を起こさせ、ピサの傭兵となっていた皇帝軍の騎兵800人を率いて1315年6月14日なんなくルッカを征服してしまった<sup>15</sup>。外国人傭兵の効果がさっそく表れたことになる。

こうしてルッカのシニョレともなったウグッチォーネは、息子のフランチェスコをそのポステスタとし、ナポリの代理を追放した。ピサによるこのルッカ征服は周囲の市を驚かし、多くの城塞がピサのもとに下った。余勢をかってピサはフィレンツェ領にも侵攻した。

この頃持ち上がった後継皇帝の争い、ハインツのルートヴィヒかオーストリア・ハプスブルグのフリードリヒ(美王)かの争いがこの時もギベッリーニとゲルフィの争いとなり、ウグッチォーネは前者を、ナポリのロベルトは後者を支援したため、アンジューとの短い友好関係は破れ、各地で戦闘が起こった。アンジューは、ルッカの亡命者やトスカナのゲルフィから報復戦を求められ、ターラント君主の息子カロをフィレンツェに派遣した。ルッカの喪失を憂える同市も戦争準備を怠らなかった。かくてピサとフィレンツェはともに大軍を動かし、1315年8月29日モンテカティーニのニェヴァウラ川をはさんで合戦し、ギベッリーニ連合軍つまりピサの勝利に終わった。激戦で、死者1万以上に上ったと言われる<sup>16</sup>。

ウグッチォーネの支持層は貴族と、職人を中心とするポ・ホ・ロ・ミヌートであり、一方富裕商人・造船業者・企業家らポ・ホ・ロ・グラツィは、彼の軍国主義と権力集中に不満をもっていた。ルッカでも、野心的な若者カストルッチォ・カストラカーニが頭角を現していた。彼も先のモンテカティーニの戦いにルッカのギベッリーニを率いて参戦し、戦功をたてていた。市民の信頼を得た彼は、ルッカの解放とシニョレの座を狙い始め、かくて両者は衝突する。



1316年1月マッサを征服したカストルッチォは、反対派30人を処刑した。これをとがめてウグッチォーネは4月1日息子ネーリにカストルッチォを捕らえさせ、ルッカに向かった。ところがその留守にピョーサの反対勢力、特にドノラティオ伯ゲラルドと富裕商人のリーダー、コシェット・テル・コッレが中心となって4月10日民衆を蜂起させ、市の門を閉ざした。反乱の報にウグッチォーネはピョーサに取って返すが入城できず、ルッカに戻った。しかしルッカでもピョーサの支配を快く思わぬ市民が反乱し、カストルッチォを解放していた。それと知らずに帰ってきたウグッチォーネは逆に捕らえられた<sup>17</sup>。カストラカーニはしかし彼を処刑することなく亡命するにまかせ、ウグッチォーネは各地を転々とし、ウエローナのカ・グランテ・テッラ・スカラのもとで傭兵隊長となった後<sup>18</sup>、1319年(11・1)ウイェンツァのポテスタとして生涯を終えた。

ピョーサでは彼の後ドノラティオ伯ゲラルドがシニョレとなり、富裕商人や企業家が市政に戻り、ギベッリーニ政治が行われた。彼の治世の間、市はフィレンツェ・ルッカ・シェーナ・ナーポリら諸都市とも良好な関係にあり、東の間の平和と安定を味わう。経済も回復し、陸上力が増した。エルバ島・トスカナ諸島・サルデーニャ島の商業支配も実質的にはまだピョーサ人の手にあった。

ところがゲラルドは1320年(5・1)若くして死亡し<sup>19</sup>、代わってシニョレとなった叔父のラニエリは内政・外交とも能力を欠いた。市に戻ってきた貴族や市民がその専制に敵対したが、彼はディフェンソレ・テル・ポロを名乗って、これを弾圧した。

一方ルッカを解放し、シニョレとなって勢いに乗るカストルッチォ・カストラカーニは、ミラーノのヴァイスコンティとギベッリーニ都市の支援を得て激しくフィレンツェに戦いを挑み、またたく間にエンポリまで征服し、さらにサンタ・マリーア・イン・モンテ、ルニジアーナ、ガルフアニアナと陥落させ、かくて「イタリア一恐れられる男」となっていた。ピョーサのラニエリとは、カストルッチォがフィレンツェを攻撃したときには支援して友好関係にあったが、彼が市のシニョレの座を狙うに及んで破れた。カストルッチォは城門近くまで攻め込んできた。

市にはそれよりはるかに重大な危機が迫りつつあった。ピョーサがルッカに脅かされているのを見て、アラゴンは好機到来とみなし、サルデーニャの権利を主張してきた。市はまず教皇ジョヴァンニ22世に訴えたが、取り合ってもらえず、アンジューもギベッリーニ都市ピョーサを支持しなかった。市はもはや、海外領土を守るだけの強力な艦隊を有しなかったし、ジエノヴァに頼ることもできなかった。ジエノヴァでは、両派の争いの末、ゲルフィが勝利してナーポリのロベルト王にシニョリアを提供していた。

サルデーニャは、前世紀以来ほぼ全島がピエーサの支配下に入っており、カリアはトノラティコ、ガッルーラはウイスコンティ、アルボレーアはダ・カプライアと、いずれも市の有力門閥の支配下にあり、トッレスだけがジェノヴァのドーリア家の下にあった。しかしアルボレーアは、1297年国主マリアーノ・ダ・カプライアの死後相続争いがあり、結局その二番目の妻の子ウゴーネ・デ・イ・ハウの手に移っていたが、ピエーサはウゴーネが庶子であることからその継承に異議をはさみ、1万フィオリニの支払いを要求していた。そこでウゴーネは、サルデーニャにおけるピエーサの支配に対する島民の不満と反感を背景に1323年4月11日反乱を起こし、千人に上るピエーサ人を虐殺し、同時にアラゴン王に支援を求めた。

そこでアラゴンは、教皇とジェノヴァ・フィレンツェほかグェルフィ都市の支持を取り付けた後、5月15日直ちに3隻のガレ船に800人の兵を派遣し、翌月には24才の王子アルフォンソ率いる300隻1万人からなるスペイン艦隊も大挙して押し寄せた。

サルデーニャを失うことは、ピエーサにとって富と商業の終わりを意味した。市は乏しい財政の中総力を挙げて準備し、翌1324年1月末40隻のガレ船で出動、3月1日サンタ・ジッタで合戦したが、今やアラゴンの敵ではなく、簡単に蹴散らされて終わった。中央集権国家の前に、小都市国家の時代はもはや過ぎていた。6月20日降伏。

和平条約では、サルデーニャとコルシカに有していたすべての領土と権利をアラゴンに譲らねばならなかった。カリアだけが封土として市に残されたが、翌年にはこれも失った。かくてピエーサは、2世紀にわたって保有してきた富と力の源を失った。その喪失は40年前のメローリアの敗戦に劣らず大きなものだった。こうして孤立したピエーサは、ルッカのカストルッチョ・カストラカーニの脅威と、この危機を利用して市のシニョリアを狙うアンジューのロベルトの攻勢を受けることとなった。

加えて1326年末には実質的にシニョレだったラニエリが死亡し、市は無秩序状態となる。グェルフィ都市はピエーサを同盟に引き込もうとし、ナポリのロベルトはピエーサをジェノヴァの下に組み入れるべく船団を派遣してきた。ロベルトの息

子のカラブリア公カロがシニョレとなっていた(1326・7・30)フィレンツェは、ピサをルッカに敵対させてカストルッチョの攻勢をかわそうとした。市内でも一部貴族、特にランフランキ家を中心にカストルッチョと結ぼうとする動きが絶えずあった。今回はその首謀者ベネット・マルボラが捕らえられて、処刑された。

1327年に入ると、オーストリアのフリードリヒに勝利したハインリッヒのルートヴィヒがイタリア遠征を決定した。5月31日ミラーノで、ギベッリーニの武人として名高いアレツォ司教グイド・タルラティ・ダ・ピエトラマーラの手からイタリア王に戴冠。ポントレモリでフィレンツェ軍を破り、ピサに陣を構えると通知してきた。市はルッカのカストルッチョを刺激することを恐れ、金子を送ってこれを断った。「帝国都市」ピサが初めて皇帝に反旗を翻したことになる。市政府は今や商工階層の手にあり、サルデーニャを失った今となつては、帝国の権威と庇護よりもフィレンツェやアンジューとの関係のほうが大切だった。

それにはお構いなく皇帝は領内に軍を進め、市の使者を捕らえた上、1カ月以上にわたって城壁の外に軍を展開して包囲した。そして10月11日入城した。皇帝は旧来の特権は全て追認したが、市は7万フィオリニという大金を払わなければならなかった。

ルッカのカストラカーニは皇帝のイタリア入りを大歓迎し、自ら軍を率いてピサ包囲に加わった。今や皇帝は全てをカストルッチョ・カストラカーニに依存していた。皮肉なことに、「イタリア随一の帝国都市」はルッカに取って代わられていた。皇帝はカストラカーニをルッカ、ピストイア、ルーニ、ウォルテッラの公のみならずローマのセナトレ、ラテラーノ公、皇帝の鷲の紋章のゴンファロニエーレ（旗手）に叙任し、しかも総代理として皇帝と同じ権限をもたせた。しかし、ピサは与えなかった。翌1328年(1・7)カストルッチョに伴われてアウレリア街道をローマに入った皇帝は、アヴィニオンにいるヨハネス21世に対して自らの手で立てた対立教皇ニコラウス5世(フランチェスコ会士ピエトロ・ダ・コルハーラ、1328-30)の手で戴冠した。

ローマから戻ってきたカストルッチョの支配下に置かれることを恐れたピサは、皇帝にシニョリアを提供した。皇帝もこれを嘉して、代理フェデリコ・デイ・オクティンゲンを派遣してきた。ところがそれを知ったカストルッチョは手勢を率いてピサ

に侵攻してき、同年4月29日には2年間ピッサのシノーレたることを宣言した。皇帝には事後承認させ、皇帝も彼をピッサにおける自分の代理に任命した。ドゥオーモでその式典があり、ついにピッサはこのルッカ人の支配下に置かれた。

13年前のウグッチォーネのときとちょうど立場が逆転したことになる。

皇帝は8月ローマを発ってフィレンツェに向けて進軍したが、シチリア艦隊がジェノヴァ人とともにオルベッテロとタラモネを占領したとの報に、グロッセートに向きを代えた。この機会にフィレンツェに決戦を挑もうとしていたカストラカーニは当てが外れた。そして思いがけなくも9月3日急死した、47歳だった<sup>20</sup>。皇帝は9月21日ローマからピッサに戻り、10月ルッカに向かい、父の権利を主張するカストルッチォの遺児たちに反対する暴動を鎮め、長男アッリーゴにルッカの支配権を認めた。ピッサとピストイアは自分が継いだ。

1329年初めには、前年皇帝によってたてられた対立教皇ニコラウス5世がピッサに亡命してき、これを受け入れたため市はアヴィニョンにいる教皇から破門された。7カ月滞在してその年の4月皇帝はドイツに向かって去った。ピッサにとって皇帝のお越しは、もはや迷惑を越えた災厄となっていた。皇帝は帰路にパヴィーアは征服したが、ミラノを陥とすことはできなかった。

2年間に渡って滞在した皇帝が去るとたちまち混乱が始まり、その代理タルラティが追放され、ドノラティコ伯ファーツィオ(ホニファーツィオ)がカピターノとなった。一方まだ市に留まっていたマルコ・ヴァイスコンティ指揮下の800人のドイツ騎士傭兵団は、ルッカを占領した。しかしその処置に困って、彼らはこれをピッサかフィレンツェに売ろうとした。両市が牽制し合っている間に、結局8月12日ジェノヴァの亡命者ゲラルド・スピノラが買い取った。わずか3万フィオリニだったと言われる。

新たにシノーレとなったファーツィオはよく統治し、市にはグェルフィが戻り、元の政府に戻った。そのことと、対立教皇をアヴィニョンに送ったことで市は破門を解かれた。トスカナのグェルフィ都市との戦争を避け、唯一マツサをめぐるシェーナと争った(1332・12-33・9)だけだった。商業も振興し、市の都市機構も整備した。彼の功績の一つにピッサ大学の設置がある。12世紀頃生まれた小さなスクォーラ(学院)を1338年にボローニャから教授を招いて大学にしたもので、1343年(9・3)クレメンズ6世によって認可された<sup>21</sup>。しかしファーツィオはその前1340年12月22日に43歳と若くして死亡した。

一方、カストルッチォのとき繁栄の頂点を極めフィレンツェと争うまでとなっていたのが、自由を失い売買の対象となったルッカの運命は悲惨だった。まず、シノーレとなったスピノラはこれを、皇帝ハインリヒ7世の子のボヘミア王にしてルクセンブルグ公ヨハンとその子カールに6万フィオリニで売った。ヨハンらは代理を残してすぐ去

ったが、カストルッチョの子エンリーコ・インテルミネリがルッカに戻ってきたとの知らせに急いでルッカに来たり、1333年(10・3)3万5千フィオーネでパルマのピエトロとマルシーリオとロランド・ロッジにたたき売った。2年後(1335・11・15)彼らはさらにそれをヴェローナのマステイーノ・デッラ・スカラに売り払い、1341年(9・24)にはマステイーノは今度はフィレンツェに転売していた。

この頃ピサでは伝統的なギベッリーニとゲルフィの党派は、帝国からフィレンツェへという対外関係の主軸の移動にともなって、ラスパンティ **Raspanti** とベルゴリーニ **Bergolini** という新たな党派に代わっていた<sup>22</sup>。前者が企業家を中心とする旧ギベッリーニであり、後者は商人を中心とする旧ゲルフィであって、その分裂の基はフィレンツェとの結びつきにあった。ゲルフィのボニファツィオ政府に対して、ランフランキ、カエターニ、ジズモンテ、グアラッキ等のギベッリーニ貴族が対立していた。この頃の後者のリーダーはマッカイオーナ・ディ・ランフランキだった。

基本的にはフィレンツェが内陸産業都市であったのに対して、衰えたりとはいえずピサはなお海洋商業都市であった。そしてピサの収入源は仲介貿易と関税と商品流通の通行税にあり、フィレンツェがルッカを手に入れることは海への出口を得ることを意味し、ピサはその収入を大きく失うことは明らかだった。

そんな1341年、フィレンツェがルッカを18(または25)万フィオーネで買ったことが分かった。羊毛業者を中心とする産業家からなるラスパンティは、フィレンツェ産品がルッカに出回ることを恐れ、商人やフィレンツェ商品の輸出業者を中心とするベルゴリーニは、フィレンツェがルッカのモトローネ港を使うことを恐れた。こうして両派は利害が一致した。カストルッチョの子エンリーコ他もルッカの権利を主張して、ピサ軍に合流した。

そこでピサはフィレンツェに先んじてルッカ領に侵攻し、ルキノ・ヴァイスコンティ(1339-49)のミラーノとルイーダ・ゴンツァーガ(1328-60)のマントヴァからの援軍を得て、10月2日モンテ・サン・キリコでフィレンツェ軍と戦って勝利し、ルッカ市を包囲した。翌1342年3月にもフィレンツェはナポリのロベルトから派遣されていたアテネ公フランス人のゴーチェ(グアルティエーリ)と傭兵隊長マラテスタ・ダ・リーミニとのもとに5万の兵を集め、ルッカを解放すべく押し寄せ、セルキョ川をはさんで戦ったが、大雨のためこれを渡ることはできなかった。結局1342年10月2日ルッカは降伏し、市内にいたマステイーノとフィレンツェ兵は去り、ルッカはとうとうピサの手に帰した。フィレンツェとの条約(1343・

11・15)は、フィレンツェがマステイーノに払っていた代金10万フィオーネを、ピサがフィレンツェに14年間で返すことだった。ピサはそれをルッカから取り立てることにした。

ピサのこの勝利は、ミラーノのルキノ・ウァイスコンティから派遣されその甥ジョヴァンニの指揮の下に戦った1千騎によるところが大きかった。しかもそれは、ミラーノによるトスカナへの最初の本格的な介入を意味した。以後トスカナは、このフィレンツェとミラーノという二大強国の争いの舞台となり、その中でピサも翻弄され最後には消えてゆくことになる。

ところがこのルッカ戦争で、その指揮官ジョヴァンニ・ウァイスコンティが捕われてフィレンツェに連れ去られていた。和平になるとともに彼は解放され、ピサに戻って歓迎されたが、同時にシニョレの座を狙い始め、カストルッチョの遺児らとともに陰謀を巡らせたが、それが露見して追放された。彼はミラーノに亡命し、叔父のルキノ・ウァイスコンティに訴えた。そのためルキノはピサに向けて兵を動かした。ミラーノはトスカナへの介入を深め、1344年4月ルニジアーナに侵攻し、近郊コンタードを荒らしたが<sup>23</sup>、マラリアのためもあって退却した。翌1345年(5・17)マントヴァのゴンツァーガの調停で和平となり、結局ウァイスコンティは金貨8万フィオーネの支払と交換にマッサ、カッターラ、ピエトラサンタら占領していた全ての領地をピサに返した。

1348年、ペストはもちろんピサにもやってきた。1月レヴァンテから商品を積んできた2隻のガレー船がアルノ河口に泊まり、それと接触した者は直ちに死に、その死者に触れた者もすぐに死んだ。5月まで続き、日に500人、人口の70パーセント3万人が死亡したと言われる<sup>24</sup>。この疫病で、セナトに後見されてシニョレの座にあったトノラティコ伯リニエリ・ゲラルデスキが若くして亡くなった。かくてピサ史の主役だったゲラルデスキ一門は姿を消し、新興貴族ガンバコルタが上昇してくる。

その死により、ティヌッチョとティエノ・ロッカをリーダーとするラスパントイと、アントレアー・ガンバコルティに率いられたベルゴリーニの党派争いははさらに激しさを増し、あらゆるところで衝突、特に夜陰にまぎれて襲撃し合った。1347年12月24日にキンシカ区で大きな衝突が起こり、武装したベルゴリーニ側が対岸のロッカ家を襲って放火し、ラスパントイ寄りだったカピターノも追放して市政を乗っ取った。以後のピサ史は、ガンバコルティ一門を中心として動いてゆくことになる。

ナーポリでは1343年ロバート王の死後、ハンガリー系アンジュー王家が介入して激しい相続争いが展開され、結局孫のジョヴァンナ(1343-81)が女王となっていたが、その勢力の弱まりは隠せなかった。1351年には、侍従長だったフィレンツェ商人ニコロ・アッチアイウオーリの勧めで、プラートをわずか1万5千フィオリニでフィレンツェに売った。プラートは、1312年にハインリヒ7世が南下してきた折り、アンジューの保護下に入っていたものだった。

これに対して、一大強国に成長してきたのがヴァイスコンティのミラーノである。以後イタリアは、フィレンツェ対ミラーノを対立軸として動くことになる。このロンバルディアの中心都市は、14世紀始めアッツォーネ(ガリアッツォと結婚したニコの未亡人ベアトリーチェの息子、1329-39)のときベルガモ・ブレシア・クレモナ・ローテ・ピアチェンツァら北伊諸市を支配下に置き、次のルキノ(1339-49)がさらにその勢力を拡大していた。1349年ルキノが死亡し、大司教だった兄弟のジョヴァンニ(1349-54)が後継した。彼はまず教会領のボローニアを落とし、中部イタリアへの進出を狙い、トスカナに侵攻して来てピストアとプラートを占領した。そして、対フィレンツェ戦のためピサを抱き込もうと使節を送ってきた。ピサは、フィレンツェとの関係が壊れることを恐れていんぎんに断った(1351年)。この時はフィレンツェとミラーノは決戦にはいたらず、皇帝の介入を望まぬ教皇クレメン6世の調停で両市は和平を結び、ピサも中立を認められた(1353年)。

一方帝国ではルートヴィヒの死(1347・10・11)後、帝位は再びハインリヒ7世の孫でボヘミア王ヨハンの子ルクセンブルグ公カール4世(1347-78)に移っていた。介入の機会をうかがっていた皇帝は、新教皇インノケンティウス6世と取り引きし、ローマで戴冠したらずぐドイツに戻るとの約束で1354年末南下してきた<sup>25</sup>。

1355年1月6日カール4世はミラーノでイタリア王となり、1月18日にはピサにやって来た。3月にはローマに向かい、途中立ち寄ったシエナでは、1287年以来続いていたグェルフィの「ノヴェ」(9人)体制を転覆させた(3・24)<sup>26</sup>。4月2日ローマでオスティヤ枢機卿の手で戴冠した後、すぐ5月5日ピサに戻ってきた。その間にラスパントイは、ピサのシニョレを皇帝に提供していた。彼は旧来の特権は全て追認したが、一方では市到着以前に、新たにシニョレとなったアントレアの甥フランチェスコのベルゴリーニ政府と交わしていた約束を反故にして市政に介入し、アンツィアーニを選び直したり、亡命したラスパントイを呼び戻したり、ルッカからの贈り物

を受け取ったり、自兵でもって要塞を占領したりした。

戻ってきたラスパソティは5月20日暴動を起こし、川をはさんで北岸に彼ら(指導者はモンテスクダイオ伯ヤコポ・イル・パッフェッタ)、南岸にベルゴリーニが陣取って戦いとなった。当然ながら、皇帝を後ろ楯とする前者が勝利し、政府はラスパソティの手に移った。カンパコルティ側は、「我らから自由とルッカを奪う皇帝を殺せ」と煽ったが勝ち目はなかった。ピエトロは追放され、首謀者7人が皇帝によって処刑された。

この動きに力を得たルッカでは解放要求の暴動となったが、ピサは兵を送って阻止した。皇帝は、ピサとルッカの事態が一応治まったのを見て、グアルティエリ・ホッポシュツを皇帝代理に任命し、各地から金13万フィオリニを徴収して6月14日ドイツに帰って行った<sup>27</sup>。

1340年代以来比較的良好だった対フィレンツェ関係はラスパソティ政府となって悪化し、各地で衝突した。また、通関税を上げたためフィレンツェはピサ港を捨て、ジェナと交渉してタラモネを使うことにした。これでピサ港はさらに衰退の度を早めた。フィレンツェに亡命していたベルゴリーニの中心人物ピエトロ・カンパコルティは、その支援のもとに1361・62年亡命者たちと800人のハンガリー兵に2千の歩兵を率いてピサ領に侵攻したが、失敗に帰した。その時戦線は海にも及び、フィレンツェはピサ港に攻撃をかけ、その鎖を奪って持ち帰った<sup>28</sup>。

1363年始め、2回目のペストが下火になるとピサも反撃を開始し、各地で領土と城を取り戻した。しかし、港の破壊と通関税のストップによる商業危機はピサに打撃を与えた。それが最大の劣勢の原因である備兵の数の違いとなって表れた。

ロンバルディアの戦場で活躍していたイギリス兵を主体とするコンパニニア・グランドテが、この頃トスカナに侵入してきて各地を荒らしていた。ピサも最初は金を払ってお引き取り願っていたが<sup>29</sup>、今度はモンフェラート侯麾下のイギリス兵コンパニニア・ビアカの騎士1500、歩兵2千を金貨4万フロリンで4カ月雇い、1363年(7・22)総計5千の兵でフィレンツェ領内に侵攻し、ピスタヤ、プラートを通過して、フィレンツェ城壁の下(オニニ・サント門)でパリオを催し、貨幣を铸造し、矢を射かけて相手を侮辱した。この時は、やはりペストで衰えたフィレンツェからの反撃はなかった。その後も毎日のごとくイギリス兵が出撃したが、フィレンツェの城壁を破るまでには至らなかった。翌1364年にはさらに6カ月契約を延長し、ドイツのボンガルト(ボンガルトン)傭兵団を雇い、計9千となった。その指揮を取ったの



が、アクトこと有名なジョン・ホークウッドだった。

フィレンツェの指揮官だったエンリコ・ディ・モンフォルテは、形勢不利と見てワインの代わりに金貨14万フィオリニを瓶に入れて贈り、傭兵たちを寝返らせた。裏切らなかったのはホークウッド配下の千人だけだったといわれる。これで形勢は一気に逆転し、フィレンツェ軍はピサ領に攻め入って各地を荒らし、リヴォルノまで侵攻し、アルノ河口のサン・ピエロ・ア・グレートでパリオを催して仕返した。この時もホークウッドらの活躍で何とか防衛し、夏8月8日にはアヴィニオンにいる教皇ウルバヌス5世の調停で休戦を結んだ。

この敗戦と商業危機の責任を問われたラスパソントイは内政改革を行い、リーダーのジョヴァンニ・テッラ・アネッコは、共和国からヴェネツィアにならったドージェ（総督制）への移行を提案した。が、アソツィアーニ評議会に受け入れられなかったため、1364年8月12日彼は武力をもって実行、政庁を占拠して自らドージェの位に就いた。フィレンツェとは占領地と捕虜の交換を実現し、そのうえ通行税も半額に減じたが、同市はもはやピサ港を使うことはなく、そのうえピサは10年で10万フロリンの賠償を支払わなければならなかった。

1367年春、急速に勢力を拡大するバルボ(1354-85)とガレアツォ(1354-78)・ウイコンティのミラノに対抗するため、教皇と皇帝がイタリアで会合するとの話があったが、カール4世は来なかった。一方ウルバヌス5世は、シエナの聖女カテリーナの願いにも応えて、いよいよフランスを引き払ってローマに帰還することになった<sup>30</sup>。4月アヴィニオンを發ち、ジェノヴァそして5月28日ピサ港に着いた。この時は市もガレー船とガレオン船各1隻を派遣して迎えた。が、教皇は市には来ず、リヴォルノから2千騎に伴われてコルネト、ウイテルボへと通過していった。7月に結ばれた両者にナポリも加えた反ミラノ同盟には、フィレンツェとピサは加わらなかった。

翌1368年春になって、カール4世は教皇の招きで南下してきた。旅費は、ピサから自由になりたいルッカが14万フロリンを提供した。ピサのドージェ・アネッコは、ミラノのウイコンティとは金で和平を買い、皇帝には予め使者を遣ってルッカのシニョリアを提供した。これに満足した皇帝はアネッコをピサのシニョレとし、ピサ

とルッカの皇帝代理に任命した(8・25)。

ところが、9月5日まずルッカ入りした皇帝はルッカ人の訴えを聞き入れてピッサ軍を要塞から撤退させ、同行していたアネッロを免職した。しかもたまたまその日アネッロの宿舎になっていた館に民衆が押し掛けてきたため建物が壊れ、彼はバルコニーから落ちて足を折った。そのニュースに、日頃の彼の傲慢と専横を憎んでいたピッサ市民は暴動を起こし、9月8日大評議会はドージェの廃位と追放を決定、コムネ政府の回復を宣言した。新たにアンツィアーニが選ばれ、かくてピッサは再び共和国となった。アネッロは結局4年間ドージェの位にあったことになり、最初は減税やワインの値下げなどで人気取りをし、外ではフィレンツェとミラノと友好関係を保ったが、任期1年だったのを終身にし、独裁を敷いて人気を失った。さしずめ、ピッサのコーラ・テ・イ・リエツォ(ローマ:1347年5-12月)というところであろうか。

カル4世は10月3日ピッサに入り、アンツィアーニ評議会と内政立て直しを協議し、この間に両派の調停団が結成されて、ベルゴリーニの帰国に同意した。最初ガンパコルティ族は排除されたが、その勢力を無視することはできず、皇帝に直訴して追放の撤回を求めた。

一門の頭だったピエトロは1万2千フロリン払って許しを得、弟のゲラルドと二人の息子とともに1369年2月24日、15年の亡命から帰国した。と、さっそくラスパソティとベルゴリーニの闘いが再燃し、ピエトロを得た後者が前者を圧倒して、彼に全権を与えた。ラスパソティは、代わってルッカに亡命していった。自分の目論見と反対の方に動く政情に、ルッカにあった皇帝は同年4月4日ルッカを独立させた<sup>31</sup>。そして6日には皇帝軍とルッカ軍にピッサを急襲させたが、失敗に帰した<sup>32</sup>。もっともその傭兵隊長は、戦うことなくガンパコルティと話をつけ、賄賂をもらって退却したとも言われる。今回もピッサは城壁と金の力で助かったことになる。

物資の流通業に携わり、フィレンツェとの関係を重くみるベルゴリーニは、フィレンツェがピッサ港に戻るよう努力し、フィレンツェも、皇帝のドイツ帰還を早めんと積極的にピッサに接近した。1369年7月20日皇帝がルッカを出立すると同時にトスカナ

では戦争が始まり、教皇とフィレンツェは、反乱して皇帝側についたサン・ミニアートを取り戻すべく、皇帝代理だったミラーノのベルナボと対立した。ミラーノはすぐホークウッド率いる軍を、次いでベルナボ自身がきて、サルツァーナに陣を敷いて荒らした。ピサは中立の立場を取ったが、結局サン・ミニアートは1370年1月9日フィレンツェに降伏した。

コンタートを荒らされたピエトロ・ガソバルティは、中立は得にならないことを悟り、ミラーノを恐れてフィレンツェ・ルッカとともにウルバヌス5世のトスカナ同盟に加わった(1370・4・3)。これを懲らしめるためミラーノ公はトスカナ遠征軍を組織し、その指揮をかつてのピサのトージェ、すっかり傷の癒えたシウヴァンニ・アネッコに託した。彼は5月16日ピサの亡命者を引き連れて攻めてきたが、城壁の守り固く、なすすべなく引き揚げた。6月には大傭兵団もようやくロンバルディアに去った。

この後一息ついたピサは、9月23日の大評議会でピエトロ・ガソバルティをシオールに選んだが彼は辞退し、カピターノ兼ディフェンソレ・テル・ポポロになっただけだった。この時にアンツィアーニの書記官になったのが、後に宿敵となるイアコポ・ダ・アッピアーノである。ミラーノとトスカナ同盟との和平も1370年11月10日に結ばれた。

実質的にはシオールだったピエトロのもとで、ピサは久しぶりに平穏な数年を迎える。というより、トスカナ地方のリーダーたるフィレンツェとの協調を基本とし、自らの自由を守ることを考えるだけでせい一杯だった。オット・サンティ(八聖人・軍事委員会)のフィレンツェがローマの教会国家と対立し破門されたとき(1375-78)も<sup>33</sup>、その妥協に不満なポポロ・ミニストが反乱して市政に座ったときも、その後再び旧支配者層が戻ってきた後チョンビの一揆とアルティ・ミノリの政府となったとき(1378-82)も、その基本政策を変えなかった。1378年7月28日にはフィレンツェとウルバヌス6世との間を取り持ち、和平に貢献した。

アラゴンやアンジューとも友好関係を保ち、ナポリ・ヴェネツィア・ジェノヴァの政変とももはや関係を持たなかった<sup>34</sup>。戦争は金を払って避けた。もはや陸では傭兵隊から身を守る力はなく、海でも艦隊を持たず、ムスリム海賊に対してはジェノヴァやシチリアの力を頼んで身を守った<sup>35</sup>。が、1383年6月には3度目のペスト襲来があり、今回も多く死者を数え、市の衰えをさらに早めた<sup>36</sup>。

## 5 没落期：1383-1406

1383年5月始め、ミラーノではベルナボ・ウイスコンティの甥シアン・カレアツォがクーデタで権力を奪い、翌年にはヴェローナ、1388年にはパドヴァを征服して北伊の大部分を掌中に収め、中部イタリアに進出して来、フィレンツェと衝突するところとなる。その中であってピサは、ミラーノとの敵対を避けて平和路線を守ろうとするが、フィレンツェとの結び付きはそれ以上に大切であり、1392年にはフィレンツェ・ボローニャ・カッターラ家（パドヴァ）・コンスエーガ家らと反ウイスコンティ同盟を結んだ。しかしミラーノは、ピサをフィレンツェから離反さすべく様々な形で触手を伸ばし、市内では親フィレンツェ政策に反対する羊毛業者や皮革業者と、同様に不満を募らせていたラスパントイの間に、次第に反フィレンツェ・反ガンバコルティ勢力が形成された。そしてその中心となったのが、亡命中ウイスコンティに仕えたこともある、アンツィアーニ評議会の書記官イアコポ・ダ・アッピアーノだった。

フィレンツェに捕虜になっていたその子ウァンニが、身代金1万2千5百フィオリニで解放されて戻って来、その解放を邪魔していたベルコリーニ派のランフランキ家との私怨のからんだ対立をきっかけとして両派は衝突し、イアコポは1392年10月21日一味を率いてクーデタを起こした。ポンテ・ウエッキオ（古橋）をはさんで北岸にはイアコポ・ダ・アッピアーノ、南岸にはピエトロ・ガンバコルタが対立する形となったが、コンタートやルッカから援軍を呼び寄せて圧倒的に数に勝るアッピアーノ側が勝利した。息子たちの救援に駆けつけたピエトロ・ガンバコルタも殺された<sup>37</sup>。町は略奪され、ガンバコルティの主だった者は虐殺され、弟ゲラルドの子の大司教ロットも逃亡した。

翌々の23日直ちに大評議会が開かれ、イアコポはピエトロと同じくボローニャのガビターノ兼ディフェンソレに任命された。彼は当然親ミラーノ・反フィレンツェ政策を取ったため、ルッカとも対立し、ルッカはフィレンツェに訴えた。またフィレンツェも密かにガンバコルティ派の亡命者を支援してピサに敵対させた。かくてアッピアーノは、ミラーノに助けを求めるほかなかった。

ピッサがフィレンツェの手に渡ることを望まぬミラノは、それに応じて1396年暮れから翌年始めにかけて大規模な援軍を派遣し、さらにその上1398年始めには市のシニョリアを要求してきた。しかし、92年のクーデターの時の約束に反してヤコポがそれを譲らなかったため、ジアン・ガレアツォは傭兵隊を派遣してピッサを攻撃した。さらに彼は使者を送って全ピッサ領の要塞を要求したので、アッピアーノはその使者を逮捕してフィレンツェと和平交渉を始めた。それを望まぬミラノが前言を撤回したので、彼はフィレンツェとの交渉を中断した。これに怒ってフィレンツェは、繰り返しコンタドに侵入して荒らした。いつものごとくまた、ピエトロの遺児たちを始めとする亡命者たちがフィレンツェの支援をえて侵攻してきた。

1398年9月1日高齢のヤコポ・ダッピアーノが死亡し<sup>38</sup>、シニョリアは子のゲラルドに移った(1399・1・21)。ところが全く無能だったゲラルドはすぐ有力者とアンツィアーニたちを追放し、疑わしい者多数を処刑した。同時に、エルバ島とピオンビエーノを含むピッサ市のシニョリアを20万フィオリノで売る契約をジアン・ガレアツォと交わしていた。ミラノ公は2月12日直ちにアントニオ・ボッロ伯、バルダッサレ・スピノーラ、フェルトリ司教他と兵4千を派遣してき、要所を占領した。これに気づいたフィレンツェは、さらに高額を提示してこれを阻止しようとしたが、もはや手遅れだった。

2月19日ゲラルドが正式に辞し、市はミラノ兵の進駐を受け入れ、この新シニョリアに忠誠を誓った。ミラノ公への市の譲渡が大評議会承認され、パウアーアにいたジアン・ガレアツォのもとに、シニョリアの笏を渡す使節団が発った。そして二つのゴソファローニ(市旗)が手渡された。ピッサ暦1400年(西暦1399年)3月31日のことである<sup>39</sup>。この時点で、ピッサは形式的には自由自治都市としての生命を終えていたことになる。しかしミラノ公は乗り込んでこず、市政はアンツィアーニの手に任せ、カンパコルティの復帰も認めた。ただ、アッピアーノに払った20万を取り戻すため重税を課した。

一方ゲラルド・ダッピアーノは、市を売って得た20万フィオリニの金を手に、ジアン・ガレアツォから自分に譲ってもらったピオンビエーノとエルバ島に、皇帝ウエンチェスラオの許可の下に1401年家領を構えて独立した。それはその後2世紀半にわたって存続する<sup>40</sup>。

ところが1402年9月3日、ハルジーア(1399・6)とシェーナ(1399・8)のシニョリアともなり、ボローニアをも獲得して(1402・6)、フィレンツェ包囲網も完成間近と思われたジアン・ガレアツォが突然没した。そして、ピッサのシニョリアはその庶子ガブリエッロ・マリアーの手に移った。彼は翌1403年11月始め正式にシニョリアに就任すべく、母(アニーゼ・モンテガッツァ)とともにやって来、容赦なく税金を取り立てた。

ところが、この頃フィレンツェと対立していたジェノヴァはシャルル6世のフランス人の支配下にあり、その長ジャン・ブーショーにこの若いウイコンティ公の後見が託され、そのお礼としてフランス王にリヴォルノの城が与えられていた。彼らフランス人とジェノヴァはピサ領内で反フィレンツェの動きを開始していた。

一方北伊では、海外領土への発展をオスマントルコの登場で阻まれたヴェネツィアが、本土内陸部への進出を続けていたが、このジャン・ガレアツォの死にともなうミラノを中心とするウイコンティ国家の解体を利して、1404年にはウイチェンツァ、翌年にはパドヴァを併合した。そこでフランスとジェノヴァは、ヴェネツィアに敵対するパドヴァのフランチェスコ・カッテラを支援し、対ヴェネツィア資金をひねり出すべく、ピサを売り払うことを決めた。新領主のウイコンティ公ガブリエッロ・マリニアは、この危険でやっかいな財産は早く手放したほうがよいと説得した。

フランスの意を受けてブーショーは、正統のインノケンティウス8世に対するフランス人対立教皇ベネディクトゥス13世を支援することと引換に、フィレンツェに40万フィオリニでピサの譲渡を申し出た。ガブリエッロ・マリニアには20万を渡し、残りの20万はパドヴァのカッテラに回す計算だった。ピサを欲しいフィレンツェは直ちにジノー・カッポニを使者としてジェノヴァに送ったが、金額の点で話はまとまらなかった。

これを知ったガブリエッロ・マリニアは、それならと自ら乗り出し、ウイコンティ公の兵をチャッテッラ要塞に閉じこめた。彼らはしかし夜陰にまぎれて逃げ出し、サルツァーナに向かった。その地でフランス・ジェノヴァ・フィレンツェの三者が加わり、26万フィオリニで手が打たれた<sup>41</sup>。が、もちろん市民は同意せず、チャッテッラ要塞だけを彼らに渡した。

数日後、ジノー・カッポニのフィレンツェ軍とチャッテッラのウイコンティ軍が合流して市の主要な城塞の占拠に来たが、ピサ市民はこれを阻止した。10月始めにはバルトルド・オルシニ指揮のフィレンツェ軍がムツィオ・アッテントロ・スフォルツァ他の多数の傭兵隊を率いて迫った。海からもブーショーに率いられたジェノヴァ・フランスの艦隊がリヴォルノに上陸し、港を占領した。一方ピサはベルコリーニ・ラスパンティ両派が団結、コンタートから応援を得、亡命者も全て呼び戻され、わずかながら傭兵も雇った。

1406年が明けてもピサは、このフィレンツェ・ミラノ・ジェノヴァ・フランス連合に完全

に包囲されたまま孤立し、食糧が欠乏し始めた。ナポリのラディスラーオ、パルマのオートネ、ブルゴニョ公らにシネリアの提供が申し出られたが、彼らはいずれも金を掴まされて断った。市は、祖父ピエトロ以来のフィレンツェとのつながりに期待して、その孫ジョヴァンニ・ガンバコルタをカピターノとしたが、結果はかえって裏目に出る。

春・夏と持久戦が続き、ピサは食糧の欠乏、フィレンツェはマリアに苦しめられた。が、城壁は不落でありピサ人の死守の意志堅いのを見て、カッポニは金で買収することを決め、亡命して金のないそのジョヴァンニを相手に選んだ。使者ビント・テッレ・ブラケを通じてプティアーノで密かに交渉、10月6日成立、サン・マルコメオ教会で公証人によって市の売却証書が作成され、ピサ側はジョヴァンニ・シアンポーリ他が署名した。売値はわずか5万フィオリニだった。ガンバコルタには、いくつかの領地とカプライアとジーリオの島が安堵された。

売買の確認のためまず密かに捕虜が交換され、10月9日にはジョヴァンニ・ガンバコルタによってサン・マルコ門が開かれてフィレンツェ軍が入城し、全て占領した。ピサの執政者となったジノ・カッポニが、アンツィアーニの館に行って市の鍵を受け取り、その前の広場で、フィレンツェが市の主人となったことを高らかに宣言した。かくてピサは自由を失い、誇り高き自治都市コムーネ、共和国としての歴史を閉じたのであった<sup>42</sup>。

## 6 ウゴリーノ伯と『神曲』

### 6.1 ウゴリーノ伯の裏切り

『神曲』ではウゴリーノ伯は次のように登場する：

地獄界は最下層の第九圏、裏切りの罪を犯した者たちが氷漬けになっているコチートの沼、祖国に対する裏切り者たちの落とされている第二円アンテノーラである<sup>43</sup>。最下層であることは、裏切りが暴力や金銭・肉欲その他諸々の罪のなかでも最も重いものであることを、氷漬けの罰は身動きを取れなくすること、さらにはその行為が身をも心をも凍らせるものであることを喩える。その穴の一つに二人の罪人が折り重なり、上にのしかかっている方が下の方の頭骸に歯を立ててむさぼり喰っている。つまり、同じ穴のムジナであり、骨肉相喰む関係であることを寓意する。上になっている方にダンテは、言い分があれば名前と理由を告げるよう促す(Inf.XX XII.127-32)<sup>44</sup>。

その語るところによれば、名は伯爵ウゴリーノ、相手は「裏切り者」ルジッィーリ。しかしその次第、「信頼していたのが、いかにこ奴の悪巧みにより

捕らえられ、死に至ったか」は、もはや語る必要はない。トスカナ中否イタリア中で知らぬ者としてない事件であった。それよりも伯が訴えようとするのは、自分たちに対する処刑がいかに酷いものであったかである。この相手に裏切られて捕まり、後に「飢餓」と名付けられる塔に閉じこめられ、食糧を絶たれて、四人の子供たちが一人また一人と動かなくなり、最後に自分もまた飢えて死んだその次第を縷々物語る。

聞き終わってダンテは、「ああ、ピエーサ、・・麗しの国 [イタリア] の民の恥さらしよ」、もし隣人たちがおまえを罰するのに手間取るなら、「カプリアとゴルゴーナの島」がアルノ河口を堰止め、皆溺れさせてしまえ。なぜなら、「たとえウゴリーノ伯が城でおまえを裏切ったと言われたとしても」、その子供たちにこのような苦しみを負わすべきでなかった。子供たちは、「若年であるが故、新たなテヘベ [ピエーサ] よ、無罪だったのだから」と、その悲惨な処刑、とりわけ伯の子供たちに対する仕打ちを憤る。(XXXIII.4-90)

ここからも窺われるごとくダンテは、ウゴリーノ伯を無実だとは言っていないにせよ、悪人としては扱わず、一貫して同情を寄せている。祖国に対する裏切りの根拠とされた城の売り渡しについても、「そう言われた」 *a veva voce* にしてもと、留保を加えている。これは、その前に登場する裏切りの罪人たち、とりわけモンタパルティの戦いでフィレンツェ軍の旗手ヤコポ・デ・パッツィの腕を切り落として、シェーナによるフィレンツェ大敗の原因をつくったと言われるボッカ・テリ・アバーティに対する態度と全く異なる。詩人は彼に一片の同情を寄せるどころか、怒りに任せて自らその頭髪を引き抜くことまでする (XXXII.76-123)。<sup>45</sup>

これに対して、相手の大司教ルジジエーリの扱いは対照的である。はっきりと「裏切り者」で、獲物を狙う「獵師の頭にして首領」、「痩せた食欲な犬ども」(市民)を扇動し、「グアラントーニにシズモンテにランフランキ」(ギベッリーニ貴族)を率いて、「狼とその子」(ウゴリーノ伯たち)を狩り立てたのであった。ダンテにとって、羊たちを導く牧者たるべき聖職者の身でありながら世俗の権力を求め、人を裏切り、ましてや慈悲もなく無実の子供たちを刑に処すのは許されざることであり、その罪はなお重かった。ダンテが、言い分があれば現世に戻ったときそれを伝えようと語り掛けるのはウゴリーノ伯にだけであり、それに応えて伯がこうして数十行にわたって弁明の機会



を与えられているのに対して、ルジィェーリは沈黙のまま顔を上げることさえしない。

次に、事件のもう一人の当事者、ガッラー国主ニノの扱いはまた異なる。彼は地獄界ではなく煉獄界前域に見い出される。つまり、前二者のごとく地獄にあって永劫の罰を受ける永遠に救われることのない罪人ではなく、前域とはいえ、これから罪を浄めて至福の界に昇る可能性のある所に置かれているわけである。しかもそこに集うのは、生前は戦や政治などこの世の俗事に没頭し過ぎて信仰をおろそかにしていたにしても、死に臨んで悔悟し、その罪を告解して魂の救済を求めるに間に合った、王侯君主ら貴顕の士であった。

したがって、その中にニノを認めたときの気持ちを、ダンテは次のように思い起こす：「気高き国主ニノ、そなたを罪人たちの中ではなく見出したとき、私はどれほど嬉しかったことか」。もっともこの言い方の中にかえって、たとえ個人的な罪ではなく党派争いという業によってであるにしても、彼がウゴリーノ伯らと同じく地獄に陥とされていないかと恐れていた、つまりそうであっても仕方ないと考えていた危惧がうかがえよう。

一方ニノはこの出会いの中で、家族とりわけ娘と妻への想いを語るだけで、ピエーサとかの事件については一言も口にしない。愛しい娘ジョヴァンナ(1291年頃生)には、自分のために祈って罪の浄めを速めてくれるよう願う一方、自分の死後ミラーノのガリアツォ・ウァイスコンティと再婚した(1300・6)妻ベアトリーチェ・デステ(1328年没)に対しては、女性の愛の移ろい易さをとがめ、「ミラーノ人が陣を張るときのマムシ[ミラーノのウァイスコンティの家紋]とて、ガッラーの雄鶏[ピエーサのウァイスコンティの家紋]ほどには、その墓を美しくはすまい」と自負する。後のピエーサとミラーノの関係を予言するような言葉ではあるけれども、ここでは家族の問題であって、特に政治的・歴史的な意味は込められていないであろう(Purg.VIII.52-84)<sup>4 6</sup>。

では一体ウゴリーノ伯はなぜ裏切り者なのか、あるいはどのように祖国つまりピエーサを裏切ったというのであろうか。また、ルジィェーリとニノを加えて三人を主人公とするかの事件とはどのようなものであったのか、わずかだが手元にあるいくつかの史書でたどってみる。

まず、ダンテのすぐ後にくるヴァッラーニでは、ウゴリーノ伯ははっきりと裏切り者である。

メーリアの海戦後1284年9月、フィレンツェはジェノヴァ・ルッカ他と同盟を結び、ピサに戦を仕掛けて多くの城を奪った。この危機を乗り切るためウゴリーノは、フィレンツェと協定を結び、市からギベッリーニを追放してゲルフィに転換することを約束した。その時彼は、「ブドウ酒の代わりに金貨を入れた瓶をフィレンツェの隊長たちに贈った」と言われる。かくて伯は、翌年1月ギベッリーニを追放してゲルフィとともに市の支配者となった（VII.98.pp.294-5）<sup>47</sup>。

しかし1288年7月にはシオリアをめぐる三つの派、ウゴリーノ伯のゲルフィ、ニーノのゲルフィ、ルジニエーリにランフランキ・ガランティ・シズモンティらのギベッリーニ、が形成された。ウゴリーノ伯はシオリアとなるためルジニエーリに接近し、ニーノを「裏切り」、その一派を追放した。しかし伯は、その「裏切り」を隠すため、その前に市を出て郊外セッティモの館に赴いていた。そしてニーノがいなくなると市に戻ってきてシオリアとなった。これを嗅ぎ付けたルジニエーリは、こうしてゲルフィの勢力が弱まったのを見て、ウゴリーノ伯を「裏切る」よう指示し、「かつて彼がピサを裏切って城をフィレンツェ人とルッカ人に譲り渡した」ことを教えて市民に襲撃させ、「二人の息子と三人の孫」とともに捕らえた。「こうして裏切り者が裏切り者に裏切られた」のであった（VII.121.pp.321-23）。

1289年3月カターノとして着任したグイード・ダ・モンテフェルトロは、彼らをアンツィアーニの広場の塔に閉じこめ、その鍵をアルノ川に投げ捨てて食糧を断ったため、彼らは餓死した<sup>48</sup>。この残酷な仕業のためピサ人は全世界から非難されたが、それは伯のためではなく、その子と孫のためである。伯は「その過ちと裏切り故に」死に値したが、子と孫は若年ゆえ無実だったのだから（VII.128.pp.329-30）。

と、ヴァッラーニからすると、ウゴリーノ伯は同盟者ニーノに対してと祖国ピサに対しての二重の裏切り者だったことになる。人物関係と時間的順序は少し混乱しているが、こうした受け止め方が当時最も一般的だったのであろう。また、ダンテの文を踏まえていることも明らかである。

次にサルトの年代記では、ルジニエーリがウゴリーノ伯を「シオリアから追い出し」、捕らえて餓死させた梗概が記されるだけで何の判定も下されていない<sup>49</sup>。

時代が下ると裏切り者説はさらに尾ひれが付く。15世紀のトロンチでは<sup>50</sup>：

すでに海戦の時ウゴリーノ伯は、ポテスタのモシニの艦が拿捕されたのを見て退却令を出したが、それは「祖国を弱体化させ、より容易に自らの隷属下に置くため」だった。そして戦後、表では悲しみを装いながら、裏では野心の実現のために着々と準備する。生まれはギベッリーニでありながら姻戚関係はゲルフィであり、フィレンツェや教皇庁とも太いつながりがあった伯

は、フィレンツェと結ぶことの利を説き、金貨の入ったブドウ酒の瓶を贈って交渉した。フィレンツェに出向き、多くの城塞の譲渡とギンバッリーニ全員の追放、市のゲルフィへの転換を約束して帰ってきた。また、ジェノヴァからの「捕虜の帰還を願う振りをしながら、彼らが帰ってくれば自分の独裁が終わると考えて、密かに邪魔していた」。ルッカに対しても、その支援を得る必要から、アシャーノ、アウアーネ、リハフラッタ、ヴァイレジジョの城塞を譲った。

こうした彼の独裁に対して1286年、ニコが追放された者を集め、謀反を企んだ。翌1287年ウゴリーノ伯はニコ派を弾圧して勝利したが、ルジニエリを頭とする第三の派が形成された。こうしてピサは三つの派に分裂した。そこでウゴリーノ伯はルジニエリを味方につけ、彼らは共謀してニコを捕らえる罠を仕掛けた。それが自分の留守中に起こるよう、ウゴリーノ伯は郊外の城に引き籠もった。ところがこの不穏な空気に気づいて、ニコはカチの自領に逃げた。それでルジニエリは、味方とともにコムーネを占領し、自分がシニオーレの座に就いた。市に戻ってきたウゴリーノ伯は驚いたが、ルジニエリは彼に政府を明け渡すよう迫った。こうして、「神の使徒たる者が世俗の争いに首を突っ込んだ」のである。

1288年7月1日ルジニエリの主唱で、ジェノヴァと和平を結ぶため大評議会が開かれたが、またもやウゴリーノ伯の反対で流れた。この期に及んでルジニエリは市民に反乱を呼びかけ、伯一家を捕らえ、餓死さすよう命じた。かくて市は「暴君」から解放されたが、「大司教は神の使徒といわんよりはサタン」というべきであった。

とすると、祖国に対するウゴリーノ伯の裏切りはメーリアの戦いの時からすでに始まっており、捕虜解放への邪魔立てまで続いていたことになる。

16世紀末のロンチオーニも、細部は異なるが基本的にはこれと同じである<sup>51</sup>：

メーリアの開戦前ウゴリーノ伯は主戦論を唱え、カピターノとなったが本心を隠し、10年前自分を追放した者に対する復讐の機会を狙っていた。戦の当日も、軍師ヤコポ・ヴァッラーニが、ジェノヴァの船が予想以上に多い(144隻)のを見て、ピサ艦隊に港を離れないように命じたにもかかわらず、出撃を命じた。しかも、ポテスタが捕らわれたのを見て、戦うことなく市に逃げ帰った。か

くてその後市にとって、「ウゴリーノ伯の帰還が何よりも大きな悲哀と苦悩」の原因となる。

ポデスタとなった後は、「ピエサを破滅さすことしか考えなかった」。「僭主」となった伯は、多数のギバッリーニを追放し、フィレンツェを喜ばすために多くの城を譲り、こうして彼は自分の市を「裏切った」のだった。ジエノヴァとも交渉できたにもかかわらず、捕虜が解放されて自分の「独裁」が邪魔されることを恐れてそれをしなかった。

ニノが共治者に選ばれたのは、彼が大身であり、グェルフィの中心人物だったからである。二人の間は最初はうまくいっていたが、さらに独裁体制を強めるため、ウゴリーノ伯はルジグィエーリの協力を得て、ニノを含むグェルフィを追放した。ところが伯はその上、自分の姉妹の子アンセルモ・カプライア伯を毒殺し、その友人だった大司教の孫アツォがそれを非難したため、伯は彼を襲って殺した。その余りの横暴さに危機を感じたルジグィエーリは、ギバッリーニを集めて対抗した。

その後伯とニノの関係は修復されたが、一方カチの教区をめぐってルジグィエーリとニノの間で争いが起こった。そこでルジグィエーリはギバッリーニ貴族を率いてニノとヴァイスコンティの追放を宣言した。その日(6・30)ウゴリーノ伯は市から7マイル離れたセッティモの城に滞在していた。ルジグィエーリは、市を「暴君」の手から解放しようとは煽って反乱を起こし、市に戻ってきたウゴリーノ伯と衝突した。激しい戦いの末、伯たちが捕らえられ、餓死さすことが決定された。「こうしてピエサ人は、厳しく過酷な独裁のくびきから解放された」のだった。

他と比べてロンチオーニには、大司教に対する非難のないことが注目される。これは、他でも一貫して教会側の肩をもっていることから推察されるが<sup>52</sup>、それが書かれた16世紀末から17世紀始めというスペインの専制支配と反宗教改革という時代<sup>53</sup>、その支配下にあったトスカナ大公コジモ1世に同書が献じられていること、作者が大司教座聖堂参事会員の地位にあったこと、などの成立の事情、さらにはロンチオーニ家が、大司教とともに行動したグァランティやランフランキらと並ぶ、リパフラッタの有力なギバッリーニ貴族であったことも関係していよう<sup>54</sup>。

これら昔の物語的な色彩の強い「年代記」に対して、今の学問的な「歴史研究」では、こうした一方的な裏切り者説は当然退けられる。が、ウゴ

リノ伯がシニョレの座を狙い、独裁体制を敷こうとしたとする点では皆一致する。一方、事件の経過や三人の関係についてはなお曖昧な点が多く確定的ではない。

まずハーリーの書は<sup>55</sup>、1200年代のピエーサを社会経済史的に分析したものであるため、ウゴリーノ伯事件そのものは特に取り上げていない。その一般的位置づけとしては、「1276年トスカナのゲルフィ同盟の成立で貴族が亡命から帰り、コムーネの政治はより穏健なものとなった。しかし貴族の反動はメローリア後ウゴリーノ伯の専制となって爆発し、彼は1288年に捕らえられるまでピエーサのシニョレだった」と記すだけである。

次にルヌアルは<sup>56</sup>、「彼の意図はジェノヴァとの戦いを再開することであり、反ピエーサ同盟から離脱さすためフィレンツェとルッカにいくつかの城を譲った。これに対して、全般的な混乱の中で、ルジニエリは世論を得た。ウゴリーノ伯はピエーサから追放され、1288年ジェノヴァとの和平が結ばれた。その後ルジニエリの仕掛けた罠にはまり、市に戻ったウゴリーノ伯は捕まって飢え死んだ」と、伝統的な見方に従う。そして最後に、「言い伝えによると彼らは共喰いした。ダンテはウゴリーノ伯をルジニエリと共に裏切り者の中に置いている」と、伝説を紹介するにとどまる。

最も詳しいのがクリスティアニで<sup>57</sup>、彼はジェノヴァに捕らわれている捕虜の解放問題を重視する：

まず、敗戦後伯がポテスタに選ばれたのは「ゲルフィ同盟との個人的関係のため」であったが、例の城の譲渡は、「当時の状況からしてどうしても必要なこと」だったと肯定する。ウゴリーノ伯が権力を握れたのは、メローリアで多くの有力者、特に「トノラティコのファーツィオ伯とラニエリ伯」がいなくなったのが大きい。が同時に、彼ら「捕虜からのジェノヴァとの和平の早期締結要求」がその後の市政を左右するものとなってくる。ところがピエーサのゲルフィはごく少数であり、伯は「自らの権力の確立を狙って内政安定のため」、1286年7月ゲルフィの有力貴族ニノを呼び寄せる。そして権力強化のため、「ギバッリーニであれゲルフィであれ反対勢力」を弾圧した。この「反市民の貴族政策」にニノも協力し、二人の間は最初はうまく行っていたが、ジェノヴァとの和平をめぐる1287年末危機に陥る。

1288年4月ジェノヴァとの和平がいったん結ばれ、ウゴリーノ伯も市民を恐れて反対はしなかったが、本心では自分の利害が絡むため望んでいなかった。ニノも賛成していたが、それは対抗上で伯を倒すためだった。ところが条件が合わず和平が実施されなかったため、ルジニエリ他がピエーサに滞在

していたジェノヴァの使者を訪ね、ファーツィオ伯と他のギベッリーニ貴族を解放してくれれば簡単に今のウゴリーノ体制を覆せる、と告げた。使者はジェノヴァに帰ってこれを報告したが、受け入れられなかった。そこでファーツィオは、早く謀反を起こすよう大司教に手紙を書いて使者に託した。ところが、使者がピエーサに着いてみると、すでに暴動が起こってウゴリーノ伯らが捕らえられていた。

著者はまた、ジェノヴァの古い年代記からの次のような記事も紹介している<sup>58</sup>：1288年6月30日ルッジィエリとその一派は、まず「ウゴリーノ伯の意を受けて」、ニーノに対しての暴動を起こした。翌日夕方ニーノが市を逃げ出したので、セッティモの城にあったウゴリーノ伯が戻ってみると、それは伯自身に対する反乱に変わっていた。ルッジィエリに味方したのは、グァランティ、リッパフラッタ、ランフランキ、サッチォ、カプローナらの貴族であった。かくて7月ピエーサはギベッリーニ政府に戻った。

これらを整理するような形でベンヴェヌーティは次のようにまとめている<sup>59</sup>：

戦後、城を譲渡したとはいえフィレンツェを同盟から離反させ、危機を乗り切ったのは、ウゴリーノ伯の「外交的勝利」である。しかし内政で失敗する。伯の政治は何よりも自らの権力の強化と敵対勢力の抑圧だったため、その政府に対するギベッリーニ貴族の反対は残る数少ない有力者、大司教のルッジィエリと結びついていった。1288年4月15日に結ばれたジェノヴァとの和平に対しても、ウゴリーノ伯もニーノも表だっては反対しなかったが、その条件が自分たちにとって損失の大きいものだったので、サルデーニアの海賊にジェノヴァの船を襲わせたり、賠償金の支払を遅らせたりして邪魔した。大司教は最初中立的な立場にあったが、ジェノヴァとの和平が失敗するにおよんで、介入するにいたった。自分の派は少数だったので、二人の間の対立を煽って分裂さす方針を取った。

ルッジィエリはまずウゴリーノ伯に接近し、ピエーサの唯一のシニョーレになれと勧めた。敵対する孫から離れてしばらく自派を連れてセッティモの城に引き籠もるよう説得し、彼が出発すると近郊からギベッリーニ勢を市内に引き入れた。1288年6月30日のことである。これに気づいたニーノはウゴリーノに知らせたが、伯が戻ってこなかったため彼は市外に逃げた。そこでルッジィエリは、クーデターの形を避けるためシニョーリアをケラルデスカ家の一員で伯の孫のニーノ(イル・フリ

ガータ)に提供したが、叔父のガットがそれを断らせた。そこでギベッリーニたちは、大司教自身をポデスタ兼カピターノに任命した。この事態を知ったウゴリーノ伯は、翌朝手勢を率いて市に戻ってきて衝突したが、数において劣り、敗北した。

以上からしても、ウゴリーノ伯がなぜ裏切り者なのかは明確ではない。あえて言えば、伝統的にギベッリーニだった帝国都市ピーサをゲルフィに変えたため、あるいは、協力者として呼び寄せたニコを、利用したうえ後に排除しようとしたためであろうか。ルジジェーリの場合は、ウゴリーノ伯に対する裏切りがあったと言えそうだが、はたして二人がそれほど信頼関係にあったのか、それとも最初から多少とも対立関係にあったのかは明らかではない。ニコについては、分からないのはむしろダンテがなぜにそれほど好意的なのかであるが、これはピーサの歴史にではなく、二人の個人的な友情関係に求められるべき問題なのであろう。

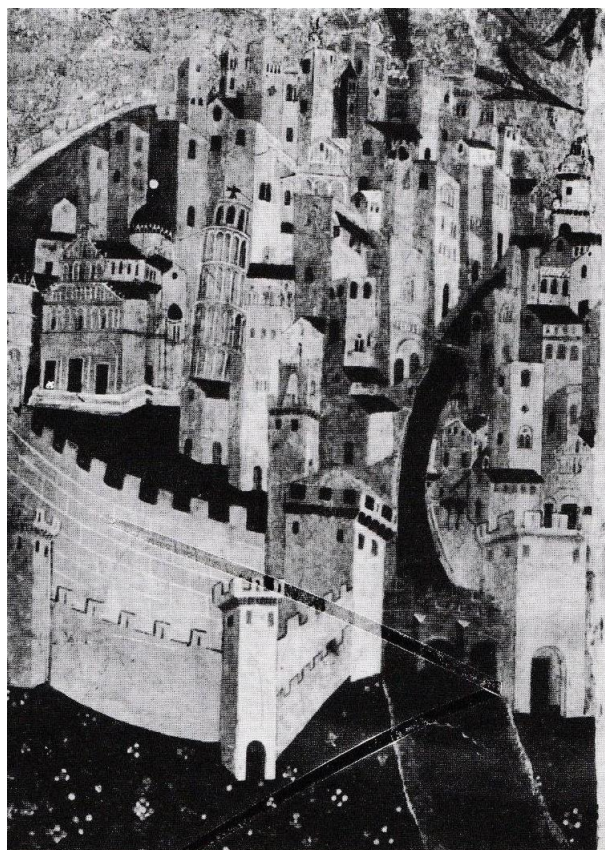


図 II-2 ピーサ 15 世紀

【註】

1. 初出：「大阪国際女子大学紀要」24号-1, 1998, pp. 151-176。

新たに下記を参照した（末尾 [ ] 内略称）：

(16) *Lamenti Storici Pisani*, a cura di Giorgio Varanini, Pisa Nistri-Lischi 1968 [Varanini] .

(17) Emilio Tolaini, *Pisa*, Bari Laterza 1992 [Tolaini<sup>1</sup>] .

(18) Giorgio del Guerra, *Rustichello da Pisa*, Pisa Nistri-Lischi 1955 [Guerra] .

図II-1: 中世ピサ史の中心舞台「ピアッツァ・テルリアンツィアーニ」(現ピアッツァ・テ・カヴァリエーリ)。正面右側が、ウゴリーノ伯の「飢餓の塔」の下部。当時はさらに高い塔であったが、後に上部が削られ、さらに左側のかつての「パラッツォ・テルカピターノ・テル・ポ・ポロ」と繋がれて今に残っている(現「パラッツォ・テル・フォヌオーモ」)。右側の建物がかつて「パラッツォ・テルリアンツィアーニ」のあったところ。1565-69年メディチのコジモ1世(中央銅像)の命により、ウァザリ設計になる「パラッツォ・テ・カヴァリエーリ」に建て直され、現在はスクォーラ・ノルマーレ・スーペリオーレ(ピサ高等師範学校)の校舎となっている。(Ammiriamo Pisa p.65)

2. この条約を起草したのが、フルネット・ラティニ。結ばれたのは10月13日。

3. フィルツェ側史料は、伯が金で買収したことを伝えている: Villani VII・98 pp.294-5.

4. メローリアの勝利により、ジェノヴァの西地中海での覇権が確立し、東地中海への本格的な進出が始まる。マルコが捕虜になったとされるクルツォラ海戦(1298年)でのジェノヴァの勝利もその一環にある。歴史は幾多の偶然を用意するものであるが、もしこの時和平が成っておれば、マルコとルスティケッロの出会いはなく、したがってかの旅行記の成立もなかったことになる。

5. この塔は最初 *Sette Vie*(七つの路), 次いで *Gualandi*, そして *Fame*(飢餓)の塔と呼ばれ、さらに後にそこに *Gherardesca* の館が建てられて今に残っている(Fig. 1)。

6. ウゴリーノ伯事件については、6.「おわりに」参照。

7. ウィッターニは、ルッカ人がこの山の上に大鏡を設置して、ピサ人に「自分の面を映せ」と言ったとのエピソードを伝えている(Villani VII・122 p.324)。ロンチオーニでは、「ピサ女性に」。また、ピサがこれを奪い返したとき、同じようにして仕返しをした(Ronconi pp.687-91)。アシアーノは、ピサとルッカの間にあるモンテ・ピサーノの峠。

8. アトリア海岸ロマーニヤ地方都市の隊長として、シェナ・ポローニャ・フランス等を相手に武勲をたて



る。ピエーサの傭兵隊長を解任された後、フランチェスコ会士となった(1220生-1298・9没)。『神曲』に登場することでも知られ、教皇ボニファティウス8世にその狡知（それゆえ狐とあだ名された）と奸計の才を見込まれて、敵対するコロンナ家を陥れる策を授けたとされる（その罪で地獄に落とされている:Inf.XXVII.4-132）。が、そうした史実は確認されないとのこと。

9. このカッローナの戦い(1289・8)に25歳の若きダンテが参戦していたことが、『神曲』にうかがえる: Inf. XXI 95. ダンテはこの頃ニノと識り合ったのであろうと考えられている。

10. ジェノヴァは、未亡人となった女性が結婚してピエーサの人口が増えることのないよう、捕虜を処刑しなかったと言われる(Tronci I p.519)。ウィッラーニは、15年間ガレ船で航海することがピエーサに禁止されたと述べているが、否定される。また一般には、ルスティッコもこの時解放されたと考えられている。マルコが解放されることになるヴェネツィアとの和平は、少し前の同年5月25日。

11. これによって、1302年1月から600人以上の白派に対する追放や処刑が行われ、ローマのボニファティウス8世のもとに使節として赴き、その帰途にあったダンテも追放される。

12. 1302年10月フィレンツェを追放されたペトラルカの父 **Petracco di Parenzo**(公証人)は1311年から12年にかけてピエーサに住んでおり、この折ピエーサにやって来たダンテは、やはり白派だった父に連れられた8歳の少年ペトラルカ(1304・7・20アレッツォ生)と出会ったとみられる: **Petrarca, Canzoniere, Mondadori 1985; Benvenuti p.171; Guerra p.42.**

13. この時も毒殺の噂があり、古ピエーサ年代記では、フィレンツェがトメニコ会士 **fra Bernardino da Montepulciano** に毒を盛らせたという(Sardo p.57; Roncioni p.674).

14. この彫刻は今も大聖堂とカンポ・サント博物館に見られる。カマイノはゲルフィだったためその後市を去り、翌年のモンテカチーニの戦いではフィレンツェ側で戦った。

15. ロンチオーニでは、ウグッチオーネがカストルッチョと内通して決起させた(Roncioni p.695).

16. この戦争でフィレンツェ軍の総指令官ターラント君主 **Pietro della Tempesta** とその子 **Carlo** が死亡し、タリアコツォの戦い(1268年)でナポリのシャルル1世に殺されたケラルトの子 **Rinieri della Gherardesca** は、その死体に紫のマントをかけて父の仇を討ったという(Sardo p.72; Roncioni p.704). ウグッチオーネもこの戦闘で息子を失った。

17. サルト<sup>o</sup>では、ウグ<sup>o</sup>ッチォーネはルッカに戻ってカストルッチォを解放し、彼に市のシニョレの地位を譲って去った(Sardo p.74)。

18. この時、同じくヴェローナに亡命してスカラ家に奇遇していたダソテと出会ったであろうと推測されている(Benvenuti p.183)。カン・グランテ<sup>o</sup>の宮廷は、当時全イタリアの亡命者たちの避難所であった。

19. 叔父により毒殺されたとの噂もある(ヨネヤマ p.199)。

20. 8月半ば対ピ<sup>o</sup>ストイア戦の戦勝祝いがピ<sup>o</sup>-サで行われて大量の魚が振る舞われ、それを沢山食べたカストルッチォは、ルッカに帰って病に陥り、9月3日に死亡したという(Sardo pp.82-3; Roncioni p.750)。

21. 後に、1564年(2・15)ピ<sup>o</sup>-サに生まれたガリレオがここで学び(1581入学)、教鞭を取る(1589-91)ことになる(1642・1・8フィレンツェ郊外アルチエトリ没)。

22. Raspantiは、‘国庫・公金をraspare(横領する・くすねる)者’の意。Bergoliniは、トロンチによれば、そのリーダーRanieri伯を敵がbergo(馬鹿)と呼んだことから(Tronci II p.68)。ロンチォーニの編者ボナィーニによれば、Ranieri Bergo di Donoratico伯の名から自分たちをBergo派と称したため(Roncioni p.803)。ベソウヴェヌーティによれば、同派には当時bergoliと呼ばれる小舟の所有者が多かったため(Benvenuti p.203)。

23. この時ニスからナーポリに赴く途中のペトラルカが、ローマのGiovanni Colonnaに戦闘の様子を書き送ったとのこと(Roncioni p.794)。

24. このペストで死亡した兄Giovanniのあとを受け継いだMatteoは、ペストを「神の怒り」とみなす(ロンチォーニも同じ)。また、ペストは「オリエントに始まり、カタイと上イント<sup>o</sup> [大陸部イント<sup>o</sup>]に広まった」という(Matteo Villani I・2 p.5)。

25. サルト<sup>o</sup>自身の手になる日誌は、この時点(1354・12・2)から始まる。

26. Cf.石鍋真澄『聖母の都市シエナ』吉川弘文館 1988 pp.28-81.

27. この折り、ボソテ区に住むSimone Rustichelliなる富裕な商人も50フィォーニ<sup>o</sup>供出している(Guerra p.35)。

28. この鎖は近代になってピ<sup>o</sup>-サに返還され、今は市の博物館に見られる。

29. 1359.7.6. その団長ラント<sup>o</sup>伯に金2千フィォーニ<sup>o</sup>払う使者に、当時財務官だったサルト<sup>o</sup>が当たっている(Sardo p.146)。

30. その前、教皇のローマ帰還の方策が講じられていた折、警護を皇帝カール4世の軍に頼もうとするウルバヌス5世に対して、それを避けたいフィレンツェの軍提供の意向を伝える使節としてボッカッチョが起用されている。1365年8月20日頃出立し、11月初旬に戻ってきた。アヴィニオンでは教皇にお目通りしたが、目的は達せられなかった。また、教皇がローマに帰還して後の1367年11月から68年2月末まで、今度はその帰還に祝意を伝える使節としてローマに派遣されている(カール4世問題についても協議したことが推測される):アンリ・オウエット(大久保昭男訳)『評伝ボッカッチョ』新評論 1994 pp.406-10.

31. ルッカはその後、1799年1月ナポレオンによって併合されるまで共和国として独立を守る。

32. 今回も女性が急を告げたという(Sardo p.184)。

33. 1376年3月31日教皇グレゴリウス11世(在位1370・12-78・3・27)は、フィレンツェ全市に聖務停止令を布告。これを解いた次のウルバヌス6世(1378・4・18. ハーリ大司教 Bartolomeo Prignano)はピサ生まれともいわれる(Sardo p.225. 編者バンティはこれを否定している)。

34. 1378・6・2アンツィオ沖でヴェネツィア艦隊と衝突して敗れたジェノヴァ船10隻のうち4隻がピサ港に避難してきた(Sardo p.232)。

35. 1375年6月アクトに率いられたイギリス傭兵団がエミリア・ロマーニア地方に侵攻してきた折、サルトは市の使節としてローニアに派遣され、アクトと交渉した。しかし結局彼らはピサ領内に入ってきて荒らしたため、多額の金を数回に分けて払った。サルトは、財務官としてその支払にも当たっている(Sardo pp.209-11)。

36. ロンチオーニの年代記は次のようなエピソードを伝えている。この疫病から逃れるためお伺いをたてたところ、神の思し召しとて、その遺体がCastiglione della Pescaiaに埋葬されているかつてのアキテヌ公にして福者キョームに取りなしを求めるべきことが告げられた。そこで、お偉方を始めとして市民全員が出向いてその遺体を大聖堂に迎え、祭壇の上に祀ったところ、9月に入ってペストは退散した(Roncioni p.935-6)。

ルヌアルは、14世紀のピサ衰退の環境的原因として、ピサ港がマレンマという荒廃した湿地に囲まれていたこと、コンタートが狭く市民の食糧を十分に供給できなかったことを挙げる(Renouard pp.261-2)。一方ハーリーは、マラリアと衛生状態の悪化によって人口増加が頭打ちになったことを強調する(Herlihy pp.80-83,192)。

37. タッピアーノと交渉中にウイコンティに雇われた刺客によって殺された、との噂もある(Sardo p.355)。 Lamenti Storici Pisaniに Giovanni di Ridolfo Guazzalotti, 'Lamento per la Morte di Pietro Gambacorta'が収められている(pp.59-63)。

タヌツィオのフランス語戯曲『ピサネッタ』にも次のような場面がある:「ピサは、キツィカという限界に棲んでおりました、橋のたもと、あの細槍で、ピエロ・ガソパコル様がお亡くなりになった所。・・・そこには、サンタ・カテリーナ修道院の院長様が、歯が4本欠けたからと言って菓子屋のグェルフィーノに転売なされた、タルタル人の女奴隷がおりました」(Gabriele D'Annunzio, La Pisanelle, Milano Mondadori 1980, pp.819-20. 人名・地名はイタリア語読みに訳した)。

38. イアコポと前年(1397・10・6)に死亡した長男ウァンニの墓は今もカンホ・サントに見られる(Sardo p.295)。

39. ピサ暦は3月25日に年が替わる。したがってそれ以後12月31日までは共通暦に比べて1年早まる。

40. ピオンビノのアッピアーノ家領は、1594年プリンチハート(君主領)となるが、1650年オーストリアに征服されて終わる。

41. この時ウァルノはフランスに与えられたが、1421年フィレンツェに征服される。

42. Fig.3 参照。トロンチによれば、この時のフィレンツェ側の署名にコンソ・ディ・メティの名が見える(Tronci II p.228)。Cfr. Lamenti Storici Pisani.

その後ピサは、88年後の1494年フランス・シャルル8世のイタリア遠征にともなうフィレンツェの混乱に乗じて、9月9日独立を宣言した。翌95年6月20日にはフランスへの帰路同王もピサに立ち寄ってこれを祝福した。が、王が去るや直ちに、メティ家を追放して共和制に戻ったフィレンツェの反攻が始まり、1499年と1500年の猛攻では城壁が何カ所か破られた。しかしそれでも落ちなかったため、1503年には当時市政府主席の座にあったピエル・ソテリーニとその書記局にあったマキアヴェッリによって、アルノ川を迂回させてピサを干上らせる計画を立てられ、7月23日にはレオナルド・ダ・ヴィンチが現地を視察・測量して可能と結論した(レオナルドの手になるその図面がマトリート国立図書館に保存されている)。8月には開始されたが難工事となり、途中で放棄された。そのまま膠着状態となったが、結局15年にわたる包囲と籠城の末、飢餓・災害・疫病に屈して1509年6月8日降伏した。この戦で荒廃したピサはその後さらに衰退の度を深め、1551年最初の人口調査時には1636家族計8571人、しかもその半分はフィレンツェ他の市外人だったという(Tolaini<sup>1</sup> pp.83-89)。かくて16世紀には「死の街」と化した(Herlihy p.83)。

ルヌアールは、19世紀始めイタリアを征服・支配したナポレオンによって、1810年スクォーラ・ノルマーレ・スー

ペリョーレが設立されたことが、かつてのフィレンツェとジェノヴァに対するその後のピエーサの雪辱だと言う(Renouard p.263)(図II-1参照)。

43. コチート：ギリシャ神話で冥界を流れるアクロン河の支流の一つ。「嘆きの川」(コキエートス)の意。アンテノラ：『イーリアス』に登場するトロイア王プリアモスの顧問で平和主義者。トロイア陥落の折りギリシャ軍によって危害を加えられなかったため、後世ではトロイアをギリシャに売り渡した裏切り者とされた。

44. Dante Alighieri, *La Divina Commedia*, a cura di Tommaso Di Salvo, Bologna Zanichelli 1987.

45. ボッカの場合も、旗手の腕を切り落としたというのは噂であり、事実かどうかは確定しない。

46. ダンテは別のところで、息子ファリナータが殺された(1287年)にもかかわらず、復讐しないで許したピエーサ人マルスッコ(・テリ・スコルジアーニ)の寛大さを讃えている(Purg.VI.17-8)が、それを殺したのはニノもしくはウゴリーノ伯とも言われる。

47. Giovanni Villani, *Cronica*, 「第7巻第98章pp.294-5」を示す(以下同)。同書の執筆はc.1320-48とされる。

48. モンテフェルトロの着任は1289年5月であり、事件には係わっていない。彼が来たとき、ウゴリーノ伯はまだ生きていたとする説もある。

49. Sardo p.47. ただし、この箇所はまだ無名記者の手になる部分で、サルドのものではない(Cf.註1 文献(1))。

50. Tronci I pp.518-44. 執筆は15世紀前半。ただし、この版は19世紀に追加・改訂されたもので、この部分がすべてトロンチの手になるものかどうかは詳らかでない(Cf.同(3))。

51. Roncioni pp.607-43. 執筆は1592-1606年(Cf.同(2))。

52. 例えば、1241年皇帝フェデリコ2世がローマの公会議に向かう高僧一行をメーリアで捕縛させたのは、「キリスト教世界に対する重大な損害」(pp.500-2)。1284年の同じ舞台でのピエーサの敗北は、それに対する神の報い。1250年12月13日には、「聖なる教会に多大の損害と、イタリアに甚大な災害をもたらし、さらにはトスカーナに呪うべきゲルフィとギベッリニの党派を再び導き入れた皇帝フェデリコ2世」が死去した(pp.522-3)。

53. 編者ボナローニは、同書がピサの異端審問所の検閲を受けた記録を紹介している(Roncioni p.XIV).

54. ボナローニによれば、ロンチオーニ家は996年オットー3世により貴族に叙された(Roncioni p.X)。ただしこれは、ルツァーティの研究(Michele Luzzati, 'Le origini di una famiglia nobile pisana. I Roncioni nei secoli XII e XIII',1966-68. 未見)によれば、後に結び関係付けたものとのこと(シミス pp.321-22)。

55. Herlihy (1958) p.91.

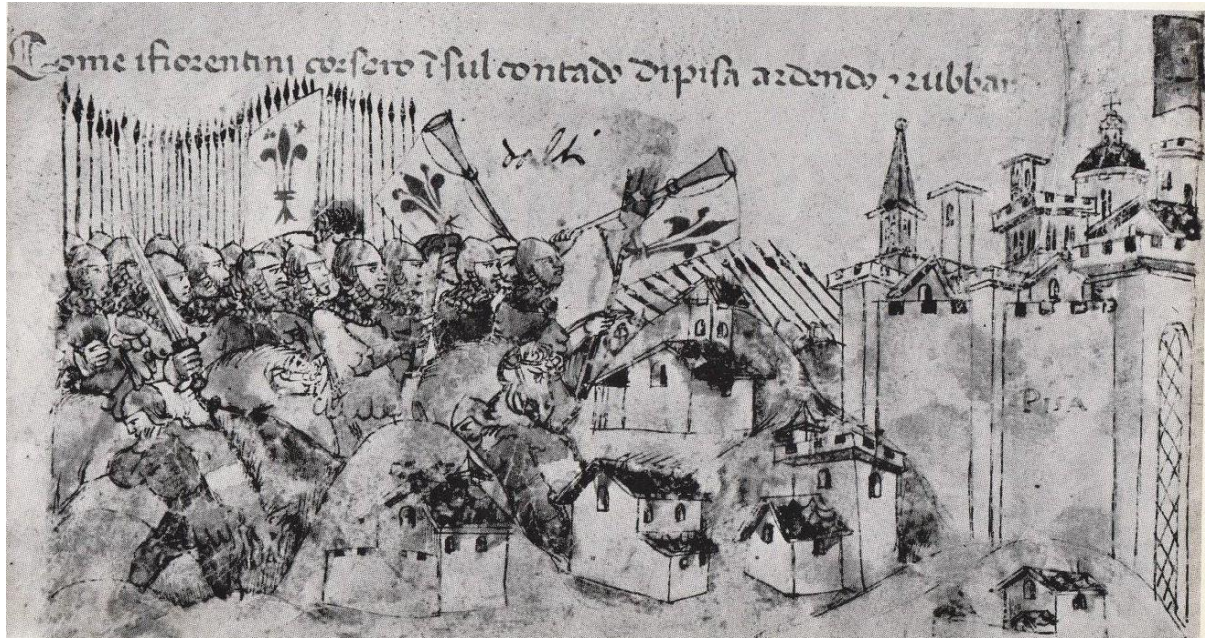
56. Renouard (1969) pp.257-8.

57. Cristiani (1962) pp.233-48. 著者は、この時期のピサ史が「今なおダソテの物語を下敷きにして眺められる」ことを嘆いている。また、まだダソテの影響を被っていない同時代の資料は「裏切りの噂」を伝えていない、ことを述べている(pp.235,247)。

58. *Fragmenta historiae pisanae*, coll.651-2 (未見。Cristiani p.247).

59. Benvenuti (1982) pp.153-60.

図II-2: 15世紀のピサ。中世都市に特徴的な塔(有力家門の私的要塞)の林立がみられる。塔はその後壊されたり建物に組み込まれたりして、今はほとんど残っていない。アルノ川をはさんで左側(北)に大聖堂と斜塔、右側(南)がキンシカ区。(Tolaini<sup>1</sup> p.71)



図II-3 ピーサ城外のフィレンツェ軍（1362年）  
 Lucca, Archivio di Stato, ms.107, G. Sercambi, *Croniche*.  
 (Lamenti Storici Pisaniより)



図II-4 ピーサに向かう皇帝軍（1368年）（同）



図II-5 ポンテ・ディ・メツゾ上でのベルゴリーニ派（左）とラスパンティ派（右）の戦い（1392年）、ピエトロ・ガンバコルタの死（同）



図II-6 ピーサ市内を行くルッカのビアンキたち（1392年？）（同）

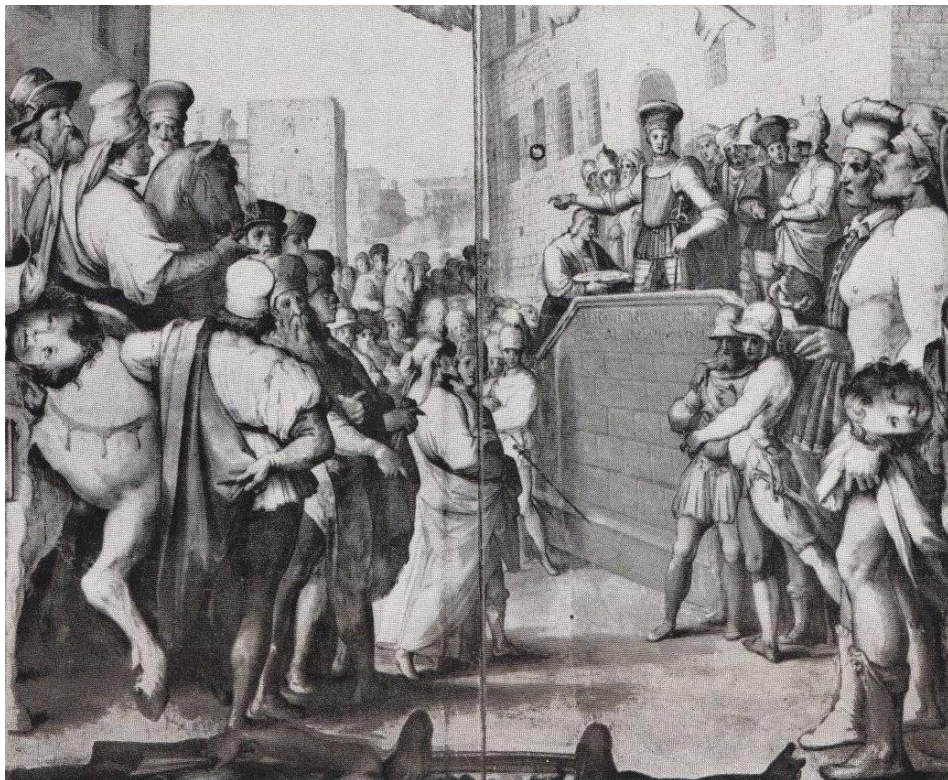




図II-7 ピーサに入るミラーノ・ヴィスコンティ軍（1299年）（同）



図II-8 ピーサを攻囲するフィレンツェ軍（1406年）  
（Firenze, Palazzo Capponi, Bernardino Poccetti 壁画、1585年）



図II-9 ピーサ征服を宣言するフィレンツェ軍の隊長ジーノ・カッポーニ（同）  
（右側の建物はパ・ラツォ・テリ・アンツィアーニ、奥にウゴリーノ伯の「飢餓の塔」）